

ZOOMによるSPレコードに関する座談会（2020年11月21日（土）開催）

当研究プロジェクトでは、2020年度から松本正美氏が蒐集したSPレコードコレクションのデータベース作成と研究を行っているが、大阪芸術大学でも、本学と同時期に大阪音楽大学から譲り受けた白壁コレクションの整理を2020年度に行った。この3大学は、関西圏にある博物館等で結成しているかんさい・大学ミュージアム連携実行委員会のメンバで、平成2年度文化庁の地域と共働した博物館創造活動支援事業として、「SPレコード―寄贈資料を引き継ぐ―」と題したZOOMによる座談会を、大阪芸術大学放送学科と同テレビ事務室の協力を得て2020年11月21日（土）13:00～16:00に開催し、55名のZOOM参加を得た。

以下の講演記録は、座談会講演者の同意を得て、文字起こししたものである。今後のSPレコードの保管、整理、取り扱いなどの情報交換に役立てば幸いである。

なお、パネリストのプロフィールを以下に示す。

パネリスト・プロフィール（発表順）

・柳 知明

大阪芸術大学に1983年から2017年まで勤務。1985年、オーディオ資料室開設に携わり、蓄音機とSPレコードを主とした音響・放送資料の蒐集と整理業務を担当。博物館の展覧会企画では音響・放送資料関連を担当。定年退職後もオーディオ史の探究を継続している。

・毛利眞人

音楽評論家。ボン大学の片岡コレクション・プロジェクト、早稲田大学演劇博物館の共同研究に招聘研究員として加わっている。単著に『ニッポン エロ・グロ・ナンセンス』（講談社）などがあるほか、ぐらもくらぶ、ビクター等で復刻CDの監修を行っている。

・大久保真利子

九州大学総合研究博物館専門研究員。芸術文化学博士。SPレコードとの最初の出会いは、大阪芸術大学大学院生時代に、大阪芸術大学博物館所蔵の長唄SPレコードのデータベース化に取り組んだことである。専門はSPレコードを用いた日本音楽の研究など。

以 上

タイムスケジュール (概要)

ZOOM による座談会

「近代遺産の発掘と活用 寄贈資料を引き継ぐ～SP レコード～」

2020年11月21日(土) 13:30～16:00

13:20～	開場 (ネット接続開始)	
13:30～13:35	開会挨拶・本事業の概略説明：篠塚義弘 (関西大学博物館)	43
13:35～13:50	〈第一部〉受贈資料の説明と整理状況報告	44
	I - 1 大梶晴彦 (大阪音楽大学楽器資料館)	45
	I - 2 小口斉子 (大阪芸術大学博物館)	48
	I - 3 篠塚義弘 (関西大学博物館)	53
13:50～14:50	〈第二部〉パネリスト講演	57
13:50～14:10	パネリスト講演 1	
	II - 1 柳知明 (オーディオ史研究者)	57
	「SPレコードのデータベース作成の意義と整理作業への助言実例報告」	
14:10～14:30	パネリスト講演 2	
	II - 2 毛利真人 (音楽評論家)	69
	「国内外 SP レコード関連データベースの現況と プラットフォーム統一の必要性」	
14:30～14:50	パネリスト講演 3	
	II - 3 大久保真利子 (九州大学総合研究博物館)	79
	「SPレコードを受け継ぎ活用すること ー所蔵館調査と九州大学総合研究博物館での取り組みをもとにー」	
(14:50～15:00	休憩)	
15:00～16:00	〈第三部〉座談会	91
	モデレータ：篠塚義弘	
	III パネリスト：柳知明、毛利真人、大久保真利子、大梶晴彦、小口斉子	
16:00	閉会	

テロップ【開始時間まで、しばらくお待ちください】

0 開会挨拶・本事業の概略説明

○司会 皆様、こんにちは。新型コロナウイルスの感染拡大が心配されていますが、この3連休はどのようにお過ごしでしょうか。

只今から、「近代遺産の発掘と活用 寄贈資料を引き継ぐ～SP レコード～」と題しまして、ZOOMによる座談会を開催いたします。

情報化・デジタル全盛の時代に、アナログ・レコードが見直されています。中でも、明治から昭和中期にかけて製造されたSPレコードとゼンマイ式蓄音機を用いた演奏会が密かに注目されています。

大阪音楽大学に寄贈されていたSPレコードを大阪芸術大学と関西大学が引き継ぎ、今年度、整理作業に取り組みました。SPレコードには歴史的音源としての価値だけではなく、社会状況を反映する資料としての意味もあります。それらを活かすデータベースとはいかなるものか、海外ではいくつかのデータベースサイトが散見され、日本国内でも一部でデータベース化が試みられています。本日は、その意義について具体例を挙げ、討論、提言していきたいと思います。

○司会 本日の講演をして頂くパネリストと座談会のメンバーを紹介します。

先ず、オーディオ史研究者で元大阪芸術大学 博物館事務長・学芸員の柳知明（やなぎともあき）さんです。

○柳 よろしく申し上げます。

○司会 続いて、オンライン参加の音楽評論家の毛利眞人（もうり まさと）さんです。

○毛利 よろしく申し上げます。

○司会 そして、九州大学総合研究博物館 専門研究員の大久保真利子（おおくぼ まりこ）さんです。

○大久保 よろしく申し上げます。

○司会 次に、寄贈資料の受け渡しをした3大学から、大阪音楽大学 音楽メディアセンター 楽器資料館・学芸員の大梶晴彦（おおかじ はるひこ）さん。

○大梶 よろしく申し上げます。

○司会 大阪芸術大学 博物館・学芸員の小口斉子（おぐち なりこ）さん。

○小口 よろしく申し上げます。

○司会 そして私。本日の司会・進行を行います関西大学博物館学芸員の篠塚義弘（しのづか よしひろ）です。

皆様、よろしく申し上げます。

○司会 本日のスケジュールですが、大きく三部で構成されています。まず最初に、「受贈資料の説明と整理状況」について3大学から報告を行い、次に3名のパネリストの方々か

ら講演を頂きます。そして、休憩を挟んで、座談会を行います。視聴者の方からの質問は、ZOOMのチャットを用いて「ホスト管理者」まで、お送りください。途中休憩の時間まで、受け付けます。本日は生中継ですので、多少時間の変更があるかもしれませんが、皆様、スムーズな進行にご協力の程、よろしくお願いいたします。

なお、本事業は、文化庁の「地域と共働した博物館創造活動支援事業」の補助を受け、関西圏にある17の「大学ミュージアム」で構成する「かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会」で企画し、大阪芸術大学放送学科並びに同テレビ事務室の協力で実施しています。

I <第一部> 受贈資料の説明と整理状況報告

○司会 では、早速 始めたいと思います。

最初に、大阪音楽大学 楽器資料館の大梶晴彦（おおかじ はるひこ）さんから、今回整理作業を行った受贈資料について説明して頂きます。それでは、大梶さん、よろしくお願いいたします。

I-1 SP レコード・コレクションの来歴と譲渡の経緯

○大槻 では私から、SP レコードの来歴についてお話いたします。

(1) 白壁コレクションの受入れ スライド① 白壁武彌氏から SP レコードの受入れ

白壁コレクションは、今から約 50 年前に、白壁武彌（しらかべたけや）（1905-1981）さんから、大量の SP レコードの寄贈がありまして、大学の図書館が受入れました。残念ですが、この経緯につきましては記録が残っておりませんので、細かいことはわかりません。ただ、白壁さんが沢山のレコードをコレクションされていたということは一部のコレクターには知られていたようですね。

このコレクションをいただく際の条件といたしまして、資料全体の目録を大学側が作成することであったということが、伝えられております。当時、昭和 43 年頃（1968 年～69 年）タイプライターで打ち込みました図書検索用の、いわゆる「図書カード」、これを何枚かまとめてコピーをし、更にそれを製本しましたのが、白壁コレクションの目録でございます。この目録は、あとで紹介があると思います。

その後、音楽大学におきまして貴重な音の研究資料として学内で活用いたしておりました。

(2) 松本コレクションとの関わり スライド② 松本正美氏とのかかわり（1999 年頃）

続きまして松本コレクションです。大学の研究所が、音の記録の収集を行う中、今から 20 年ほど前の 1999 年に、伊丹市在住の SP レコード・コレクター松本正美（まつもとまさみ）さんから約 2 年間、数回にわたり、資料収集にご協力いただいております。松本さんご自身が作成された「リスト」のコピーも活用させていただきました。

スライド③ 松本コレクションの受贈

暫くして松本さんがお亡くなりになりました。約 10 年前のことですが松本さんのご自宅を処分するにあたり、ご遺族から SP レコードを寄贈したいとのご連絡がありました。松本さんのお宅に伺いまして、SP レコードとともに、松本さんが作られました「リスト」の原本も頂戴いたしました。このリストも後ほど、ご紹介があると思います。

(3) 研究活動の終了と SP レコード群の譲渡

スライド④ 研究活動の終了 SP レコード・コレクションの譲渡

暫くしまして約 8 年前、2012 年、SP レコードを使いました大学内での研究活動が終了し、白壁コレクション、松本コレクションの活用が終了いたしました。

今から 5 年前、2015 年に大阪音楽大学創立 100 周年記念事業の一環として、博物館が入ってございました校舎の移転が決定されました。ところがこの移転先の収蔵スペースが、かなり少ないといいましょうか、小さくなってしまいましたので、大量の SP レコードを持ち続けることが難しくなってきました。この膨大なコレクションが、散逸することを一番おそれたのですが、散逸することがないように有効活用の検討を始めました。

ちょうどその時期に今日の主催団体でもあります、かんさい・大学ミュージアム連携の会で、私の隣にいらっしゃいました、このあと登壇なさいます大阪芸術大学博物館の柳さんにご相談いたしました。その時に「その SP レコードを南河内の山に移しませんか？」というお声掛けをいただきました。この南河内というのは大阪芸術大学さんのある場所です。ほぼ同じ時期に関西大学博物館さんからも「千里山に移しませんか？」のお言葉をいただきました。この千里山というのは関西大学さんのある場所のことです。

スライド⑤ 白壁コレクションは大阪芸術大学博物館

松本コレクションは関西大学博物館

このお二人の言葉は本当にありがたく今でも鮮明に覚えております。このお二人のお言葉が今日のテーマ「寄贈資料を引き継ぐ」につながったのではないかと感じております。

駆け足ではありましたが、私からの報告は以上でございます。ありがとうございました。

○司会 大槻さん、ありがとうございました。

SPレコード・コレクション
の来歴と譲渡の経緯

大阪音楽大学楽器資料館

①白壁武彌氏から
SPレコードの受入れ

②松本正美氏とのかかわり
(1999年頃)

③松本コレクションの受贈

④研究活動の終了
SPレコードコレクションの譲渡

⑤譲渡先
白壁コレクションは
大阪芸術大学博物館
松本コレクションは
関西大学博物館

I-2 大阪芸術大学博物館での「白壁コレクション」整理作業

○司会 続いて、大阪芸術大学 博物館の小口齊子（おぐち なりこ）さんから、同大学での整理状況について説明して頂きます。小口さん、資料の準備はよろしいでしょうか。それでは、お願いします。

○小口 大阪芸術大学博物館の小口です。よろしくお願いいたします。

「白壁コレクション」の整理作業、主にその方法についてご報告したいと思います。

大阪芸術大学「オーディオ資料室」（スライド）

本学には、アナログによるオーディオ・ビジュアル機器を収蔵している「オーディオ資料室」というものがあり、蓄音機と SP レコードも沢山収蔵しています。今日のパネリストの柳さんが本学にご在職中にその整理作業に当たっておられましたし、毛利さんと大久保さんにもそれぞれ違う機会に関わっていただいています。

こちらがその写真です。レコードはこのように収蔵していて、数万枚という風には書いてあるのですが、まだまだ未整理の部分が多くて10万枚以上あるのではないかと思っています。そこに白壁コレクションが加わりました。

「白壁コレクション」（スライド）

「白壁コレクション」は、そのほとんどが袋に入った状態で、一枚一枚に整理番号も付されていました。先ほど大槻さんからご紹介のあった目録のページがこちらです。

曲名と作曲者、会社名、レコード番号が記されています。今日はその実物もお持ちいたしました。こちらです（実物提示）。このように非常に分厚い冊子になっていて、9,200枚でしたか、このようにぎっしり記載されています。非常に大変な作業であったことがわかります。ただ残念なことというか、仕方ないのですが、レコードが作曲者のアルファベット順に組み替えられていて、それも大変な作業であったと思うのですが、そのためにレコードに付された番号がバラバラになっています。

実際のレコードの方も本学に搬入した際にバラバラになってしまって番号順ではなかったために、せっかく目録があったのですが、その内容と実際のレコードを一致させることが非常に困難でした。

そこで今年度は、いったんこのリストのことは忘れて、この目録の中の一定数をきっちり整理することでレコード整理の手順を明確化して、今後、博物館のスタッフが空き時間に皆で取り組んでいけるようにすることをテーマに据えて、1,000枚を目標に掲げて作業に取り組みました。

1,000枚というのは今年の作業人件費としての予算が290時間分だったので、それぐらいが適当かなということで、とりあえず目標に掲げています。

(1) レーベルのスキャニング (スライド)

実際の作業手順ですが、まずレコードをスキャニングします。これには事務室で使っている複合コピー機のスキャン機能を使っています。こちらがそのデータです。これがオリジナルになりますのでコピー機の最高解像度の 600dpi でとりました。

実際読み取りに必要なのはレーベルの部分とその周りの刻印、ここまでですので、データサイズを小さくしたり、刻印がよく見えるように明るさの調整をしたりという風にして写真を加工しています。この加工作業にはマイクロソフトの「フォト」アプリが非常に便利でした。

(2) レーベルの記述と刻印を記録 (スライド)

こうやって取り出したレーベルの写真を基に、この画像を見ながら、レーベルに書いてあることを、エクセルで入力していきます。この段階では、旧字体であるとか、ヨーロッパの言語、アクセント記号がついたような文字もそのまま入力しています。その際の注意事項、こういったことを注意しながら進めていきました。今年目標を 1,000 枚にしておりましたので、棚 3 本分、1,140 枚が済んだところでいったん入力作業を終了しています。

ここまでで 190 時間、レコードを事務室に運んでスキャニングをして入力をするという作業すべてを、平均すると 1 枚当たり 10 分程度でできたことになります。

このエクセルの入力だけでもある程度の検索は可能になるのですが、これをデータベースソフト、本学では File Maker Pro を使っていますが、そちらに取り込んでいきます。

(3) データベース化 (スライド)

File Maker Pro で本学が使用している SP レコード用のデータベース項目が、こういったものです。レコードを物としても収録して管理していかないとイケませんので、レコード 1 枚につき 1 データということでレコード本体に関わる「どこにあるか」とか「いつもらったか」、「状態」といった項目と、あと、コンテンツについての内容が A 面と B 面それぞれにあり、全部で 60 項目以上になるのですが、これらを含めて 1 データ 1 レコード分としています。

すごく多く思われるかもしれないのですが、いろいろな項目を記録しておくことで、例えば活用するときと同じ曲が録音方式によってどう違うとか、時代によって演奏方法がどう変わったか、みたいなことをテーマにすることもできて、活用の幅が広がるように思います。

ただ、レコードは音楽だけではないので、例えば落語であるとか、スポーツ中継とかそういうレコードの場合にはこの項目は少し音楽に偏りすぎているかなと、そういうときにはどうしたらいいのかなというところを悩んでもいます。

オーディオ資料室 円盤レコード資料 (スライド)

実際の入力画面がこちらになります。

最初にエクセルから吸い上げた盤面記録を参考にしながら曲名とか作曲者名とかを原語と英語と日本語にわけて書いています。同じことのようにみえるんですが、左側の日本語と英語の部分は検索をする際のタームと考えて、原語では違うように記述してあっても、できるだけ共通の綴りになるように努めています。その際の参照先としては各種の辞典もありますが、今でしたら Wikipedia など、沢山の人が参照されているという意味で一定信頼できるソースではないかと捉えています。

DAHR と CHARM (スライド)

盤面に書いてある以外の項目、例えば録音時期だとか発売日、発売価格、そういった情報は、様々な紙ベースのディスコグラフィもあるのですが、まずは web 上のこういったディスコグラフィを参照して入力しています。

ただこの段階になりますとディスコグラフィの読み取り自体に専門的な知識が必要になってきますので、今私たちは出来るところ、分かるところだけを埋めているというのが現状です。

まだまだ不完全な状態なんですけれども皆様の何かお役に立てば幸いです。

以上です。ありがとうございました。

○司会 小口さん、ありがとうございました。

大阪芸術大学博物館での 「白壁コレクション」整理作業

大阪芸術大学「オーディオ資料室」



蓄音器 約 260 台、SP レコード 数万枚など



「白壁コレクション」



(1) レーベルのスキヤニング



オリジナルデータは最高画質で



- ・ データサイズを小さくするためトリミング
- ・ レーベルの周囲の刻印まで含める
- ・ 刻印が認識できて、レーベルの色が変わらない程度の明度 (Microsoft フォトアプリが便利)

(2) レーベルの記述と刻印を記録

- ◆ロゴなど以外のすべての内容を記録。入力するべきかどうか迷ったら、入力する。
- ◆刻印があれば、あわせて記録。
- ◆歌文のアクセント記号つき文字も、そのまま入力。
- ◆擦り切れて読めない文字は半角「?」、迷った部分は、後で分かるように赤字にし、詳細を備考欄に記しておく。

所蔵 No.	種 No.	種別	状態	取得日	取得先	取得方法	取得額
74108-0704	74108-0704	レコード	ch		レーベル	レコード番号	
74108-0704	74108-0704	レコード	ch		レーベル	レコード番号	
74108-0704	74108-0704	レコード	ch		レーベル	レコード番号	

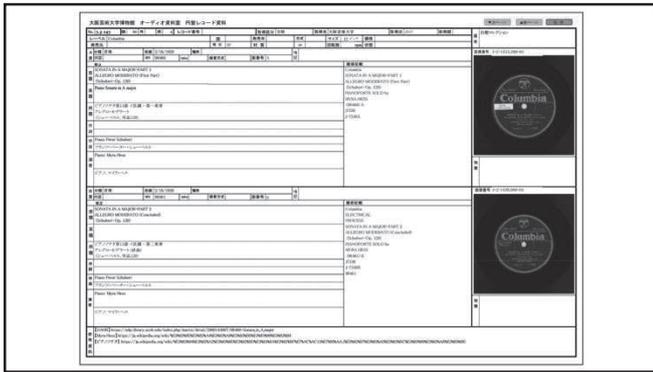
(3) データベース化

レコード全体に関わる項目

所蔵 No.	種 No.	種別	状態	取得日	取得先	取得方法	取得額
材質	サイズ	回数	ch	方式	レーベル	レコード番号	
発売日	発売元	発売国	価格	参考資料	備考		

A面・B面のコンテンツに関する項目

A: 録音面		A: マトリクス番号		A: 面番号		A: レーベル画像		A: 画像番号	
A: 原題	A: 英語	A: 英語	A: 英語	A: 邦題	A: 邦題	A: 演奏者	A: 演奏者	A: 演奏者	A: 演奏者
A: 作曲	A: 作曲	A: 作曲	A: 作曲	A: 作詞	A: 作詞	A: 作詞	A: 作詞	A: 作詞	A: 作詞
A: 収録日	A: 収録場所	A: 収録場所	A: 収録場所	A: 録音方式	A: 録音方式	A: テイク	A: テイク	A: テイク	A: テイク
:内容	:内容	:分類	:分類	:特記事項	:特記事項	:別盤	:別盤	:別盤	:別盤
B: 盤面記載		B: マトリクス番号		B: 面番号		B: レーベル画像		B: 画像番号	
B: 原題	B: 英語	B: 英語	B: 英語	B: 邦題	B: 邦題	B: 演奏者	B: 演奏者	B: 演奏者	B: 演奏者
B: 作曲	B: 作曲	B: 作曲	B: 作曲	B: 作詞	B: 作詞	B: 作詞	B: 作詞	B: 作詞	B: 作詞
B: 収録日	B: 収録場所	B: 収録場所	B: 収録場所	B: 録音方式	B: 録音方式	B: テイク	B: テイク	B: テイク	B: テイク
B: 内容	B: 内容	B: 分類	B: 分類	B: 特記事項	B: 特記事項	別盤	別盤	別盤	別盤



DAHR

(Discography of American Historical Recordings)

<https://adp.library.ucsb.edu/index.php>

CHARM

(The AHRC Research Centre for the History and Analysis of Recorded Music)

<https://charm.rhul.ac.uk/index.html>

I-3 関西大学での松本正美コレクションの整理状況

○司会・篠塚 引き続きまして、関西大学での「松本正美コレクション」の整理状況について、私から説明をさせていただきます。では次のページをお願いいたします。

1 松本コレクション手書きノート（スライド 1）

松本コレクションを引き継いだ時にはレコードと併せて、松本氏自ら書かれたノート、B5版とB4版の2種類を一緒に頂きました。

このなかでこちらの大きなB4版の方を見て頂きたいのですが、「音盤目録 まつもとミニライブラリー」と書かれております、この間に画面では少し字が小さいですが、「レコードは古きが楽し 雑音の一つ一つに偲ぶ昔も」と音楽評論家のあらえびすさんの言葉が書かれています。そしてもう一枚の方にも「歌の不思議さは、その時代の 云々」とこちらの方は松本さん自らの思いが書かれています。このように非常に自らのライブラリーへの愛着をもたれているライブラリーを頂いたということを感じておりました。

ちなみに先ほどの「あらえびす」というのは、『銭形平次捕物控』の作者として知られる小説家野村 胡堂（のむら ことう）さん、(1882(明治15)年10月15日～1963(昭和38)年4月14日)この方の音楽評論家としてのペンネームがあらえびすということになります。

2 倉庫で保管（スライド 2）

次お願いします。先ほど、大槻さんからご説明がありましたように大阪音楽大学から大阪芸術大学を経まして関西大学へダンボールのまま運ばれてきたんですけれども、実はこのままの状態です3年間経過しておりました。それを今年度作業しました。

3 作業室に移動し荷解き（スライド 3）

まず荷解きをしました。これは作業室に移動して荷解きした状態です。実際に荷解きをして先ほどのリストと照合しようとしたんですが、レコードが混ざっておりました。

4 分野別に仕分け（スライド 4）

そこで、次にありますけれども、まずそのレーベルを見まして、先ほどの26の分類に従って、大まかに手作業でコンテナに移しました。

5 レーベル、番号順に（スライド 5）

そして、次にその分類事にレーベルとレコード番号順に並べ替えを行いました。

6-1 レーベルのスキャン (スライド 6-1)

こうゆう作業を行った上で、コピー機でスキャン作業をいたしました。

今回の作業の目的は、データベースの全体像を知ることという事にして、そのレコードが何枚あるか、それからレコードの状態、例えばカビがあったりとか割れてるのかとか、そういう全体像を知るとというのが第一の目的でありました。

6-2 スキャンした画像例 (スライド 6-2)

それで、スキャンした結果ですが、ここに二枚ほど例を挙げました。左側のレコードのスキャンした部分こちらのほうは傷が入っています。画面では少し見にくいかもしれませんが、少しここにすじがあります。それから、右側のレコードは、この上側に少しかけている部分がございます。SPレコードではよくある事なんですけれども非常に脆いということので取り扱いを間違えますとこういう形でフチカケをよくいたします。こうゆう状態をタグをつけまして、どういう状態にあるかということ記録して全体図を把握したという形になっております。

6-3 スキャン数 (概算) (スライド 6-3)

これがスキャンした概算数です。この中から枚数の多いもの、例えば民謡であったり、映画、映画説明、流行歌、演歌、童謡、それから映画主題歌、ジャズポピュラーすべてで約8,148枚。これ面数ですので枚数にいたしますとこの半分、約4,000枚というのが全体像だというのが分かりました。

次、お願いいたします。今回作業の主目的は以上ですが、これと並行いたしましてスキャナーでとったレーベルの部分をエクセル入力しました。その入力の仕方について少しご説明します。まず入力ルールを決めました。

7-1 テキスト入力 (スライド 7-1)

レコードの穴の上、左、右、下という順番で、それから最後に、この周りの刻印の部分、これらについて分かる範囲で結構ですということで学生さんを使ってレコードの入力をいたしました。ルールは作業を進める中で、変更や追加を行いました。

7-2 テキスト入力作業 (スライド 7-2)

次の画面が実際の入力作業の風景です。大きなディスプレイであれば1台、それから小さいノートパソコンであれば2台使いながら入力作業を行いました。

最初に言いましたけれども、今回の目的はコレクションの全体像を知ることが目的でありましたので、レコードの枚数とレコードの状態を知ることによって、一応の目的を達したと思っております。

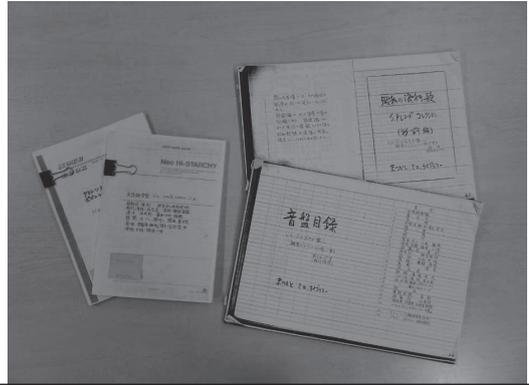
最後に、スキャンした画像データがあれば、貴重な実物資料を使わずに、近い将来エクセル入力ができると考えています。

私から松本コレクションの整理状況についての説明は以上であります。

松本正美コレクション の整理状況

2020.11.21.
関西大学博物館

1 松本コレクション 手書きノート



2 倉庫で保管



3 作業室に移動し荷解き



4 分野別に仕分け



5 レーベル、番号順に



6-1 レーベルのスキャン



7

6-2 スキャンした画像例



8

6-3 スキャン数（概算）

分野	枚数	分野	枚数
2.義太夫（浄瑠璃）	232	16.朗読、講演、実況記録	176
・・・		17.流行歌、演歌、書生歌	1,802
9.民謡	814	・・・	
・・・		21.童謡、唱歌、・・・、軍歌	642
11.映画（弁士）、映画説明	456	・・・	
・・・		26.映画主題歌、ジャズ・ポピュラー	1,954
		合計	8,148

9

7-1 テキスト入力

- レーベル入力要領とエクセルフォームを作成し、画像をもとに入力作業を行う。
 - レコードには、A面、B面があり、片面毎に入力
 - 入力順序の指定（上、左、右、下、外周刻印）
 - 全角、半角、大文字、小文字などの指定
 - 可能な範囲で旧字体を用いる
 - 刻印も入力 など

- SPレコード取扱いの注意点



7-2 テキスト入力作業



11

II <第二部>パネリスト講演

○司会 引き続きまして、第二部のパネリストによる講演に移りたいと思います。

まず最初は、オーディオ史研究家の柳知明さんから「SPレコードのデータベース作成の意義と整理作業への助言実例報告」と題しまして、講演をいただきます。柳さんのプロフィールにつきましては、皆様に事前にお配りいたしましたテキストをご覧ください。

それでは、柳さん、よろしくお願いします。

II-1 SPレコードのデータベース作成の意義と整理作業への助言実例報告

○柳 今ご紹介いただきました柳です。では、これから「SPレコードのデータベース作成の意義と整理作業への助言実例報告」と題しまして、データベースを作成する必要に私自身が迫られた経緯から順番に述べていきたいなと思っております。

まず、私が蓄音機とSPレコードに深く関わるようになりしたのは、1985年の春に世界有数の蓄音機・レコードコレクターでありました故品川征郎氏が収集された歴史的な蓄音機とレコードのコレクション、いわゆる品川コレクションが大阪芸術大学に収められたことがきっかけになります。この品川コレクションと申しますものは、1890年代から1950年代までの蓄音機を主とし、ラジオ・テレビも含むオーディオ機器、それから円筒レコード、SPレコードの膨大なコレクションになります。この中には、特にレコードとしましては、音楽だけではなくて様々な分野、種類のレコードが含まれておりました。そして、その収められたコレクションですけれども、蓄音機の多くが実動状態にあったということが大きな特徴でありました。

(スライド 2) こちらが収められたときについできました品川さん手書きのリストです。蓄音機類は約300台、レコード約3万5,000枚ということになっております。ただ蓄音機のほうはこうやってモデルごとにリスト化されておりましたけれども、レコードにつきましてはざっくりとした分野別の概数だけというもので、レコードそのものの個別のリストというのはなかったわけです。

この膨大な品川コレクションを収納するために造られたのが、先ほど小口さんのほうから図示されました芸術情報センター地下3階にありますオーディオ資料室ということで、これは本来図書館の書庫の将来拡張用のスペースで600平米という非常に広い場所に造られたものになります。次の画面をお願いします。

(スライド 3) オーディオ資料室は1985年9月24日にオープンしました。これがそのときの新聞記事になるわけですが、結構マスコミにも取り上げていただくことができました。ただこのオーディオ資料室、品川コレクションだけが収められたのではなくて、大阪芸術大学の放送学科、音楽学科のスタジオで使用されていた1950年代から1960年代の業務用の音響機器も収められており、音響機器の歴史を俯瞰するとともに追体験できる施設として、収められた機器類の動態保存というものを目指しておったわけです。

また、特に蓄音機は、プロダクトデザインの変遷あるいは家庭内での娯楽、ホーム・エンターテインメントが受容されていく過程、その変遷を、レコードは、著作権にたいする意識の変遷というものを俯瞰できる、歴史的な資料ということで、音楽以外の資料としての価値を見いだすための施設でもあったわけです。

この品川コレクションを含めたオーディオ資料室のコレクション、その整理作業につきまして、当時、私は蓄音機等の機材関係の整理とメンテナンス、レコードは、大阪芸術大学音楽学科の音楽学を専攻した卒業生で個人でもレコードコレクターでもあった人物を嘱託職員として採用して、コレクションのリストアップ作業というのを開始したわけです。次、お願いします。

(スライド 4) これがそのとき作りました、蓄音機のリストになります。品川さんのリストに沿った形でモデルごとの記載、それから用語解説なども入れております。次、お願いします。

(スライド 5) レコードのほうにつきましては、作曲家別のリスト、(スライド 6) 演奏者ごとのリストというのを作成していったわけです。こういったリストの作成に当たりましては、まず蓄音機につきましては、品川さんが手書きのリストというのを作っていただいていたのでそれを基にしましたけれども、それだけでは当然足りません。次、お願いします。

(スライド 7) そこで参考にしたのは蓄音機の文献です。これは特にビクターの蓄音機について、細かくモデルごとに販売価格や年代等々が書かれました文献資料です。

(スライド 8) こちらはエジソンの円筒形の蓄音機になります。こういった細かな文献資料というものを使って、蓄音機のリスト化並びに解説文の作成というのも行っていったわけです。次、お願いします。

(スライド 9) レコードは1950年代から出ておりました、これは歌のレコードだけに特化した、いわゆるディスコグラフィーズです。マトリクス番号といいますのは、レコードの原盤につけられた番号です。それを順番に並べて演奏者、タイトル、それから細かな回転数や、あるいは発売されたレコードのレコード番号、いわゆる発売番号です。そういったものをリスト化したもの。次、お願いします。

(スライド 10) こういった形のもので、中には細かく複数のレコードの番号が書かれているものもございます。こういったものを参考にしてリスト化していったわけです。これを活用しまして、様々な展示とかということにも利用していこうということであったわけです。

このオーディオ資料室のほうですが、こういったリストも利用しながら授業での学内利用並びに一般公開なども度々開催いたしまして、大学の記念行事での学外展示あるいは資料そのものの貸出しというようなことも行っておりました。新聞、テレビ等の取材を受けることも多数ありまして、マスコミに報道がなされますと、SPレコードを寄贈したいという申出が多数寄せられることになりまして、個人の方やいろんな公共施設などからも寄贈を受けて、日々レコードが増えていくことになります。また、品川さんからも度重なる追加納品が行われて、蓄音機類につきましては400台以上、レコードに至りましては概数すら把握できない状況となっていたわけです。

こういう状況の中で運営していったオーディオ資料室ですけれども、1993年に大学の組織変更によりまして、管理をしておりました部署が事実上休眠状態になり、私自身も系列校へ異動することになり、現場を離れることになりました。ただこの後も、教員による共同研究が継続して行われていきまして、蓄音機についてはデザイン学科教員によるプロダクトデザインの研究対象となりました。そこで研究されたものが学外展示もされたりしております。SPレコードにつきましても、音楽学科の教員が中心となりまして共同研究を行っていったわけなんですけれども、まず資料のレコード、これが膨大な量であるということ、そして、こういったSPレコードを含めた古いレコードについての基礎知識を持つ教員が不在であったということが要因となり、残念ながら十分な成果を上げることができずに共同研究を終了、教員の個人研究として円筒レコードのアーカイブを行ったことで終わっております。

そういった状況が続いた中で、2002年に大阪芸術大学に博物館が設置されまして、先ほど発表いただいた小口斉子さんが学芸員として着任されました。そして収蔵作品の整理作業に着手されるわけですが、その一環としまして、SPレコードの整理作業も行われております。当時の大学院の音楽学専攻の研究員、学生がレコードの写真撮影、当時はまだデジタルではなくてフィルムの写真です。そして、レーベルに書かれてある項目、タイトルや演奏者等々のデータ化に取り組んでいただきました。レコード約2,500枚、そのうちのSPレコードは約2,400枚です。その基礎データというのを作成していただいています。

蓄音機につきましては、デザイン学科教員による共同研究が継続しておりまして、蓄音機の細部の写真撮影と寸法計測、それに以前作成をしておりました蓄音機のリスト、解説文のデー

タを合わせてデータベース化というものが進められていきます。私が2003年に博物館事務室へ異動となりまして、蓄音機のデータベースの原型というものが出来上がるわけです。次、お願いします。

(スライド 11) こういった形で、これもFileMaker Proを使ったデータベースということになっていきます。これをさらにブラッシュアップしまして、次の画像をお願いします。

(スライド 12) 所蔵品のいろんな整理作業、それから展覧会を開催する上での利便性を図るために、少し拡大したものになります。特に蓄音機の外観の写真だけではなくて、やはり個別の製品、蓄音機なりを示すところで行きますと、銘盤、製造番号の書かれたものもきちっと掲載していくということを図って行きました。

こういった形で蓄音機のほうはデータベース化が曲がりなりにも進んでいったわけですが、レコードにつきまして、大変悩みました。私自身、音楽あるいはレコードの専門ではございません。以前に作成しておりました作曲家別あるいは演奏家別のレコードのリストですと、なかなか所蔵しているレコード自身と結びつけることが難しかった、困難だったということで、そこで地道な作業になることを覚悟で、レコードについても蓄音機と同じようなデータベースを作成していこうと思い、いろんなディスコグラフィーといった文献資料も購入してもらい参考にして、以前に作成したレコードリストに準拠した形で、レーベルに記載されたタイトル、演奏者等の情報とレーベル周辺の刻印をまずまとめていこうということを考えました。

ちょうどそういったことを考えて実行しようとする段階で、当時大学院生であった大久保真利子さん、この後お話しいただく大久保真利子さんが、研究対象として長唄のSPレコードを取り上げられることになりまして、当時棚出しできておりました長唄のSPレコード約1,000枚のリスト化を行っていただきました。さらにその翌年、2004年には、そのリストでは不足するデータ、レーベルに記載されていない部分、作者の詳細あるいは発売年等を調査していただいてリストが完成しました。そのリストが次の画面になります。

(スライド 13) こちらには様々な、収録タイトルだけではなくて発売年、こういったものも調査していただいていますし、作者名なんかもなかなか邦楽のレコードの場合は作者名が書いていない、あるいはこれは何世の人なのかということが分からないことが多いわけですが、そういったことも調査して記載していただいています。

この大久保さんの整理・研究が行われる過程の中で私自身が感じたことは、レーベルに印刷された情報では情報不足であると。特にレコード自身が発売されていたときにはわざわざ書かなくても分かっていたことが、今では分からなくなっている。また、SPレコードはそもそも

CDのように統一規格の下に作られたものではないですから、SPレコードと一口で言いますが、形状が円盤であること以外、全てがメーカーごとに異なっていたと言っても過言ではない、それがSPレコードなんです。次、お願いします。

(スライド 14) 例えばこれはフランスのパテ社によりますごく初期、1900年代の初期のレコードのレーベルに該当する部分ですけれども、これは紙、印刷ではありません、エンボスです。凹みの部分に色粉を塗って表している。しかもこのレコードは内周スタートです。レコードと申しますと、外周から内周に向かって再生していくという頭しかない、「えっ」というようなレコードになるわけです。次、お願いします。

(スライド 15) さらに、これはアメリカで発売されたレコードですけれども、STANDARDとBUSY-BEEというこの2種類のレコード、これは両方ともアメリカのコロンビア社の系列会社の傍系の会社になります。ただこのSTANDARD、この画像で見てもお分かりかと思えますけれども、この真ん中の穴の直径が14.3ミリあります。非常に大きいわけです。BUSY-BEEのほうは穴の下にこういう四角い切り欠きがあります。ということは、こちらのこの2枚のレコードはそれぞれ自分のところの専用の蓄音機じゃないと再生が難しいということになるわけです。また、次、お願いします。

(スライド 16) こちらは“HIS MASTER'S VOICE”、イギリスのグラモフォン社、HMVのレーベルのレコードになるわけですけれども、レコードの番号「D. J. 102」という全く同じレコード、これのA面とB面になります。ただ、ここのところ、A面のほうはスピードが81、ということは81回転です。B面のほうは79回転ということで、A面とB面で回転数が異なっています。このレコード自身は歴史的な録音を再発売するということで、もともと片面版として発売されたレコードをA面、B面に取り込んだわけです。そうすると回転数が違ってくるといって、同じレコード会社にもかかわらず、その年代、あるいはその録音したときのスタジオによりまして回転数が違うということ、これはもう当時は当たり前のことだったわけです。さらに、レーベルに書かれている曲名や演奏者名も省略されていたりとかということが多々あったわけです。また、次の画面をお願いします。

(スライド 17) こちらはアメリカのビクター社のレコードですけれども、レコード番号は同じ88127です。ただこれは両方とも録音の年代が違います。この録音、左側にあるものが古いわけです。1908年の録音、右側が1911年の録音で、ただ演奏者、歌手そのものはエンリコ・カルーソーで同じです。曲も基本的にはヴェルディのオペラ「アイダ」の第1幕で歌われます「清きアイダ」という非常に有名なアリアなんですけれども、左側のほうにつきまし

ては、その「清きアイダ」だけが収録されています。ただ右側のほうは「清きアイダ」の前に歌われる「私が将軍なら」というレチタティーヴォが歌われているわけです。ですから、本来オペラではレチタティーヴォがあってアリアが歌われていくというその流れそのもの、オペラの流れに沿ったものがこちらの右側のほうのものになるわけですが、これが全く同じレコード番号で発売されている。本来なら、録音した年代も違い、当然発売した年も違うわけですから、レコード番号が違っても当たり前のはずですが、同じレコード番号で出すと。これは恐らくエンリコ・カルーソーという非常に有名な人々に人気のあった歌手であったから、わざとそうしたのかなということもありますが、こういったこともレコードが発売された当時は当たり前のことだったわけです。それが、年数がたちますと全く分からない。同じレコード番号なのに「あれ、曲の長さが違う」「歌っているものが違う」ということになってしまうわけです。

こういったところ、これはどうしたらいいのかということでもさんざん悩むわけです。その中で、やはり先ほど見ていただきましたディスコグラフィーです。これの情報ということが非常に大事になってくる。それをデータベースの中に取り込んでいこうということでやり出したのが、次の画面をお願いします。

(スライド 18) レコードのデータベースとして最初に作ったものがこちらになります。レコードの画像とそのレーベルの中に書かれてある文言を項目として洗い出す。それから発売年とかにつきましてはディスコグラフィーから、あるいは当時の出されていた目録、カタログから引っ張り出してくるという形で、まずは作り出していきました。そのときに参照しました、特にビクターのレコードにつきましての文献というのが次の画像になります。

(スライド 19) この“THE ENCYCLOPEDIA OF VICTOR RECORDINGS”というこちらの書籍は、マトリックス番号、レコードの原盤につけられた番号順にタイトル、それから演奏者というのが並んでいきます。それと同時に録音年月日、そしてあと、この録音した原盤が一体何種類のどんなレコード番号をつけて売られていたのかということが書かれているわけです。例えば、レコード番号が31677、それと65026、68124と1つの原盤に3種類レコード番号がついている。ということは、3種類のレコードの発売が行われたということになるわけです。こういったディスコグラフィーというのが非常に重宝いたしました。ただこのディスコグラフィー、全てのレコード会社を網羅するということにはなかなか至っていなかったと。それを、さあ、どうしていこうかということで、様々な資料というのを照合していく必要があったというのが大変苦労したところであります。

ちょうどこの作業を進めている2013年に、当時大学院の助手でありました多田純一さんが、この次お話しいただきます毛利真人さんに研究補助を依頼されまして、毛利さんがショパンのレコード調査をされました。結局、ショパンの作品のレコード344枚の基礎データ、レーベルに書かれてある事柄、刻印の情報といったことを抜き出していただきました。そして、そのショパンのレコードを抽出するときに周辺にありましたレコードにつきましても、おおまかな分類でもって棚卸し作業をしていただいたということで、この後、大学のデータベースを作っていく上で非常に大きな助けとなったわけです。

その作業をしていただいている中で、先程小口さんから紹介がありましたDAHRというアメリカのUCSB、カリフォルニア大学のサンタバーバラ校の図書館がされているサイトが大幅にブラッシュアップされまして、非常に多彩な項目、そしてたくさんのディスコグラフィーの情報を一つのフォーマットにまとめるということをされました。それが非常に参考になりまして、次の画面をお願いします。

(スライド 20) まず、それを参考にして行ったのが、これも小口さんの説明にありましたけれども、まずレーベルに書かれてある事柄を一つにまとめる。そして、そこから細かなタイトル、演奏者といったものに分類していく、分けて項目として立てていく。その作業をしたのはなぜかといいますと、やはり古い時代のレコードの曲のタイトルが、果たして現在のタイトルと同じかどうか。また、演奏者の名前、それから、今となっては作曲者が当時認識されていたものと違っているといったことも多々出てきております。そういったものの場合、昔の名前の検索だけではできません。現在分かっている名前でないとは検索できないということが出てきますので、そういった項目について修正をした形でタイトルを入れていくという作業を進めていったわけです。次の画面をお願いします。

(スライド 21) 最終的にやっていった形としてまとめていったのがこちらのフォーマットになるわけですが、これは先ほど小口さんのほうから提示されたものと全く同じものです。修正項目も原タイトル、イタリア語で作られたものだったらイタリア語、フランス語ならフランス語、そして英語、そして日本語という形で入れていく。そして、そのときにいろんな参考にした参考資料についても記載をしていこうということです。あと、そのディスコグラフィーやDAHRのサイトでもちまして非常に参考になったのが、やはり同じ原盤でもってどれだけのレコードが作られているのか、この当該レコード以外の同じ収録されたレコードの番号も記載していくということで、利用範囲をできるだけ増やしていこうということになったわけです。言わば、レコードのデータベースというのは、様々な整理をしていく上で、あるいは展

覧会等でレコードをどう見せていこうか、どう受け取ってもらおうかということを考えていく上で、必要に迫られて作っていったというものになります。

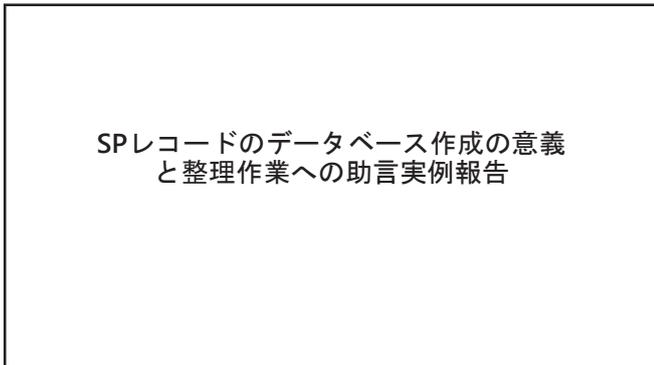
大変苦勞することではありますけれども、データベース化することによって、簡単に、早く、楽に利用できるよくなる。これができるだけ統一されたフォーマットでもちまして広がっていきますと、様々なデータベースを参照にするとときに非常にやりやすくなるということが言えるんじゃないかと思っております。次、お願いします。

(スライド 22) そういった結論に達したのは、やっぱりこういった事柄です。SPレコードの特徴、まず、SPレコードというのは、記録した内容を再生できる初めてのメディアであった。そして、そのレコードがあることによって、場所や時間にかかわらず、いつでも音を聴くことができる。また、ホーム・エンターテインメント、劇場に行かなくても音楽を楽しむことができる。ホーム・エンターテインメントの最初のものであったということ。それがゆえに、レコードというのは社会状況の影響を受ける。また、逆に社会状況に影響を与えるものになっていったわけです。そういったものを考えますと、このレコード、特にSPレコードの場合は、歴史的な音源ということだけではなくて、文化史を物語る上での貴重な資料であるということが言えるんじゃないかと思えます。

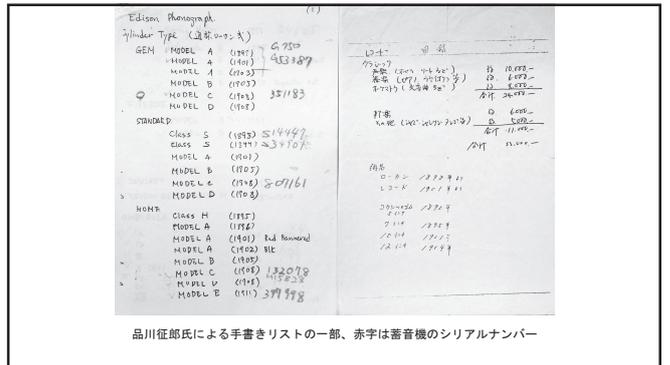
こういった事柄につきまして、今回大阪芸術大学と関西大学でのレコード整理作業におきまして、最も注意していただいた点というのは、もう何度も述べておりますけれども、レーベルに記載された内容と刻印を漏らさずデータ化すること、そして、レーベルに記載されている内容というのは様々なものがあります。パテントナンバーや宣伝文句、そういったもの、あるいはラジオ放送に使うなといったようなこともあります。こういったことは今回のデータベース化にとっては重要なことではありません。ただし、こういったことを判断するのは大変難しいことでもあります。確実に判断できない場合というのは、必ず省かない、記載していくということをお願いして行きました。ですから、不安なことがあれば、あるいは読み取りにくいものがあれば、必ずその旨を記載した上でデータ化していくということです。今回、実作業に当たっていただいた皆さん方、大変このことをよく理解していただいていたと思っております。

このレコードのデータベースがどのように発展していくか、どのように統一されていくのかということにつきまして、この後お話しいただきます毛利さんが大変深く取り組んでおられますので、私も毛利さんのお話、大変伺いたいと思っておる次第でございます。

ちょっと駆け足になりましたけれども、以上で私の話、終わらせていただきます。ありがとうございました。



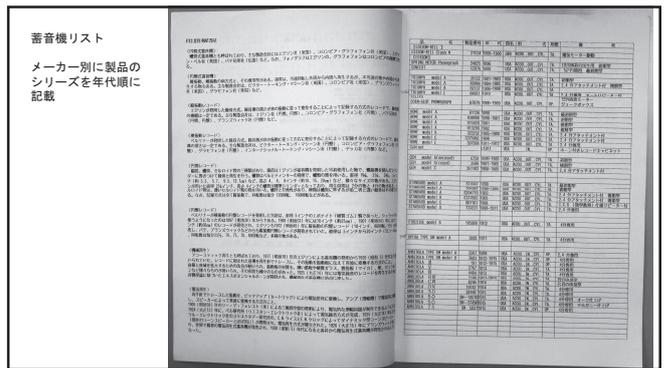
1



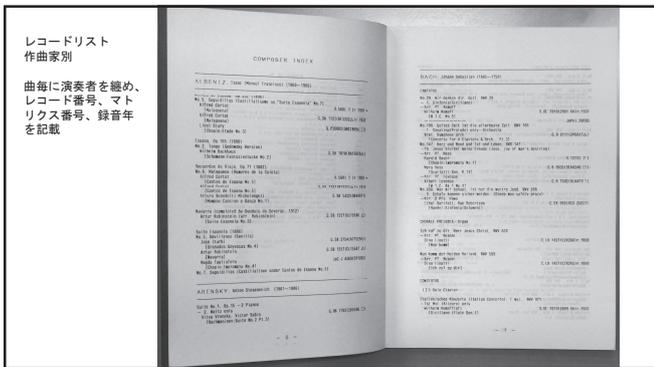
2



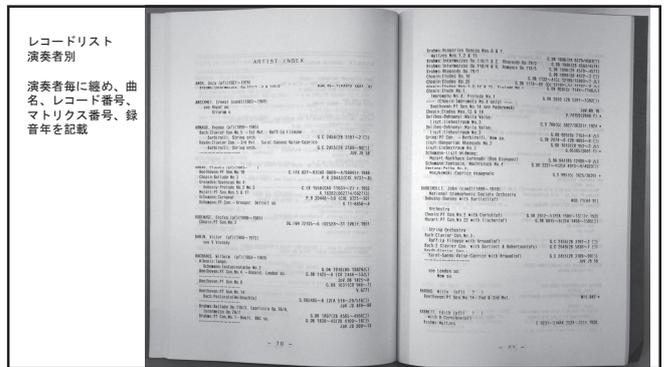
3



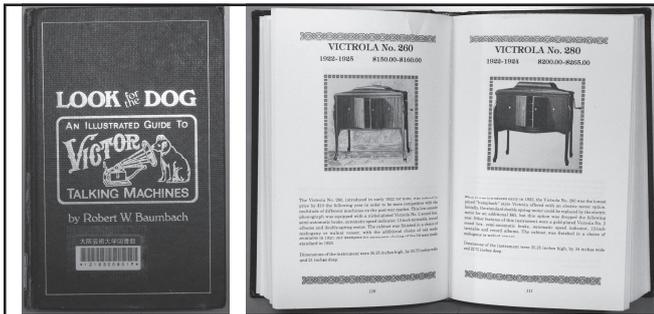
4



5

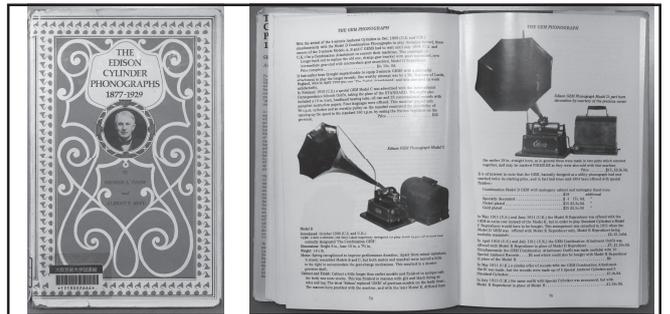


6



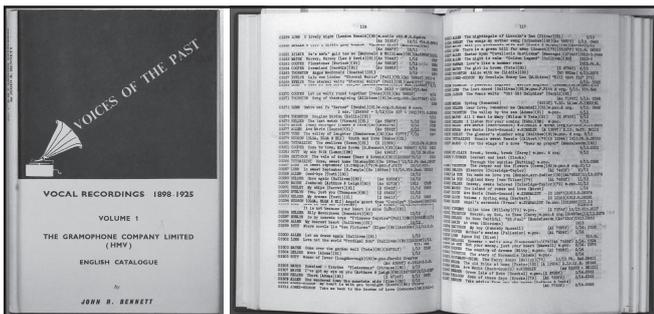
LOOK for the DOG (1981年初版)の表紙と中身、最新刊は2005年版で番音機は全てカラー写真になっている。著者のRobert W. Baumbach氏は、2003年にビクター社の番音機の機種別出荷データを纏めた the Victor Data Book も著している。

7



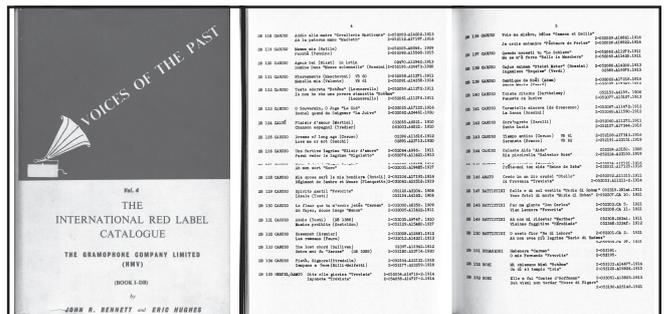
THE EDISON CYLINDER PHONOGRAPHS 1877-1929 (1978年初版)の表紙と中身、最新刊はペーパーバック版で番音機は全てカラー写真になっている

8



VOICES OF THE PAST vol.1の表紙と中身、1950年代に出版された、グラモフォン社(HMV)歌のレコードだけのディスコグラフィ、全11巻、レコード番号、演奏者、曲名、78回転以外の場合は回転数が記載されている

9



VOICES OF THE PAST vol. 4の表紙と中身、第4巻はインターナショナルの12インチ赤盤だけのディスコグラフィ

10

デザイン学科教員の共同研究で作成したデータベース

File Maker Pro で作成されており、以降のデータベースの基になった

11

項目を追加、修正した番音機のデータベース

12

通称子
録音機頭数:30面 アルバム:8面録

通称子	録音機頭数	アルバム	面録	通称子	録音機頭数	アルバム	面録
1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9
10	10	10	10	10	10	10	10
11	11	11	11	11	11	11	11
12	12	12	12	12	12	12	12
13	13	13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14	14	14
15	15	15	15	15	15	15	15
16	16	16	16	16	16	16	16
17	17	17	17	17	17	17	17
18	18	18	18	18	18	18	18
19	19	19	19	19	19	19	19
20	20	20	20	20	20	20	20
21	21	21	21	21	21	21	21
22	22	22	22	22	22	22	22
23	23	23	23	23	23	23	23
24	24	24	24	24	24	24	24
25	25	25	25	25	25	25	25
26	26	26	26	26	26	26	26
27	27	27	27	27	27	27	27
28	28	28	28	28	28	28	28
29	29	29	29	29	29	29	29
30	30	30	30	30	30	30	30

大久保真利子氏が修士論文作成のために整理・調査した長唄のデータ (Excel)

13



14



15



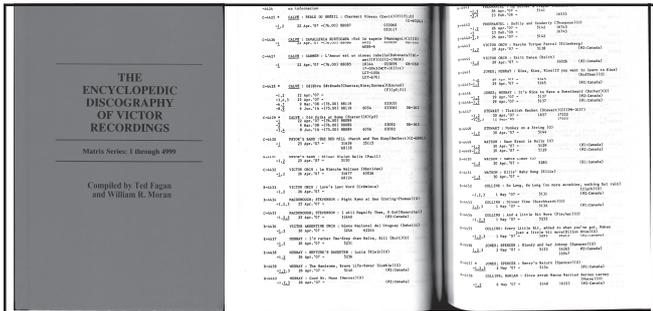
16



17

No.	000075	種別	録音機頭	録音機頭	レコード番号	J54521	取得区分	取得日
レール	レール	レール	レール	レール	レール	レール	レール	レール
発売元	日本ビクター蓄音機株式会社	発売年	1939/05	記録方式	永平	サイズ	10 インチ	規格
回転数	78rpm	材質	セツク	状態	良好			
分類	音楽	種別	あきれた、ころす					
タイトル	大人の四季	収録						
備考								
作詞	あきれた、ぼんず	作曲	あきれた、ぼんず					
演奏	あきれた、ぼんず (田代義隆、芝利夫、坊屋三郎、森田善朝)							
分類	音楽	種別	あきれた、ころす					
タイトル	大人の四季	収録						
備考								
作詞	あきれた、ぼんず	作曲	あきれた、ぼんず					
演奏	あきれた、ぼんず (田代義隆、芝利夫、坊屋三郎、森田善朝)							

18

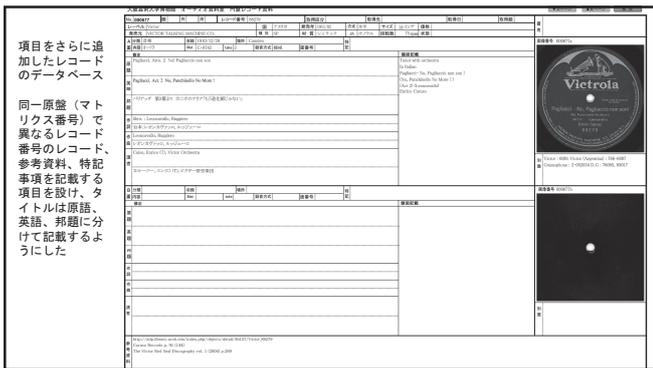


THE ENCYCLOPEDIA OF VICTOR RECORDINGS OF VICTOR RECORDINGS Matrix Series: 1 through 4999の表紙と中身、1986年に出版された、マトリクス番号順に並べられ、演奏者、曲名、録音年月日、回転数、レコード番号が記載されている。UCSGBが公開しているDAHRの原典の一つ。

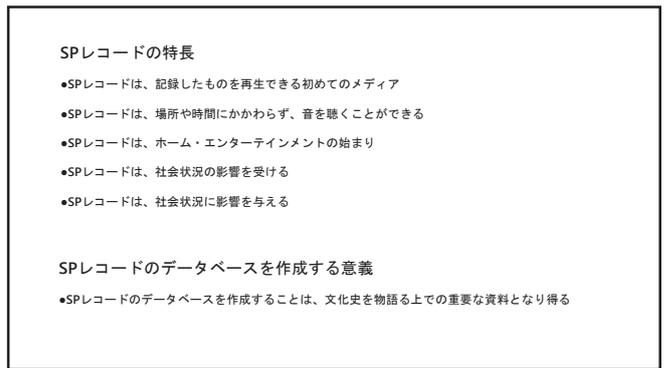
19



20



21



22

II-2 国内外S Pレコード関連データベースの現況とプラットフォーム統一の必要性

○司会 柳さん、どうもありがとうございました。

続きまして、音楽評論家の毛利真人さんから「国内外S Pレコード関連データベースの現況とプラットフォーム統一の必要性」ということでお話をいただきたいと思います。毛利さんのプロフィールにつきましても、事前にお配りしたテキストをご覧ください。

それでは、毛利さん、よろしく申し上げます。

○毛利 よろしくお願いいたします。

「国内外S Pレコード関連データベースの現況とプラットフォーム統一の必要性」ということで、これからお話をさせていただきます。

パワポをお願いします。長ったらしいタイトルをつけましたけれども、平たく言いますと、前半、世界のデータベースの紹介を駆け足で、それから後半では、主としてレコードのための書誌について述べさせていただきます。次のページ、お願いします。

(スライド 2) 世界のデータベース、ヨーロッパから見ていただきましょう。SOUNDS、これは英国図書館、B Lと言っておりますけれども、B LがSOUNDSというデータベースを持っております。これは2017年に始まったプロジェクトでして、英国全域、アイルランドですとかスコットランドですとかで、十ほどのハブ機関で保存されておる多岐にわたる音源をデータ化して誰でも聴けるようにするという計画です。現在、9万点音源が公開されておりまして、S P音源はただそのごく一部です。音源の多くを占めますのはオーラル・ヒストリー、それからフィールドワーク、ラジオ放送の録音です。S P音源はクラシック音楽ですとかポピュラー音楽、レーベル紹介といった複数のジャンルに含まれておりまして、S Pレコード単独のデータベースというのはございません。

その下のGALLICA、フランス国立図書館が持っておりますデータベースです。シリンドーレコード、それからディスク式レコードのユニークなコレクションを持っておりまして、珍しいものでは1900年、パリ万国博覧会の年にちょうどパリにおりました日本人の音声をシリンドーに録音しておりましたりとか、戦前にフランスに留学しておりました語学学者の上田萬年が「平家物語」の録音をパリで行ったといったような非常に珍しい録音がございます。フランスにはフォノベースというデータベースもございます。こちらはシリンドーが大体主なんですけれども、シリンドー録音とディスクで1万点以上収録されております。初誌はカタログナンバ

一もマトリックスナンバーも記載されておりまして、特にシリンダーの場合は画像を、角度を変えて執拗に写真を撮ってアップしているのが大変面白いんですけども、これはシリンダーもディスクも共に、肝心の録音年の記載がないんです。このアーカイブはシリンダーを音源化するためにArcheophoneという装置を開発しておりまして、例えば東京藝術大学所蔵のシリンダーのデジタル化などを行っております。

その下でございますのは、ザクセン州立図書館兼ドレスデン工科大学図書館、SUBが持っておりますSUB Mediathekという機関でございます。こちらは大変よく整備されたデータベースでして、オペラ、声楽関連のSPレコードが主となっております。レコード個々のレーベル意匠、デザインですとか際立った特徴、商品番号、カタログナンバー、マトリックスナンバー、それからグラモフォン系の録音に関しましては録音年月日と録音場所、ロンドンですとかベルリンですとかが書誌情報に盛り込まれております。レーベル画像が全てに添えられておりますので、大変視覚的に分かりやすいデータベースとなっております。

その下でございますDANSK LYDといたしますのは、デンマーク王立図書館のデータベースです。こちらは1900年代から1950年代まで、クラシック音楽、ポピュラー音楽、それから民謡を聴くことができます。基本的にこちらはPDとなった音源が公開されております。必ずしもデンマークで録音された音源だけというわけではございません。ドイツですとか英国ですとか、ほかの国の録音も含まれております。書誌的には録音された年度が記されているのみです。レコードの細かい情報というのは盛り込まれておりません。それから、録音年の記載されていない音源も多々ございます。次のページ、お願いします。

(スライド 3) ほかにヨーロッパにはSPデータベースがございますけれども、これらヨーロッパ各国のデータベースを統括して横断検索するプラットフォームがEUROPIANAです。3,000以上の機関、美術館ですとか博物館、図書館などが参加しております。SP音源も大変たくさんヒットするんですけども、ただ個々のデータベースが、書誌情報がばらばらなものですから統一が取れておりません。これはEUROPIANAで検索をしても、一個一個のデータベースでまたちょっと検索をするのにコツが要るといような、いろいろとまだ発展過渡にあるかなという気はします。次のページ、お願いします。

(スライド 4) 次は世界のデータベース、アメリカのデータベースを見てまいりましょう。

National Juke Box、これは米国議会図書館のデータベースです。1800年代の音源ですとか1900年代から大体1950年代の音源、全てで大体1万5,000点ほどがございます。商業音楽だけではございませんでして、古いフィールドワークの録音ですとかラジオ放送の録音も含まれて

おります。この中のビクター系の音源と書誌情報は、次に述べるカリフォルニア大学、UCSBのコレクションと重複しております。

そのUCSBがその下のカリフォルニア大学サンタバーバラ校図書館でございますが、Discography of American Historical Recordings、略称DAHR、先ほど柳さんのお話の中にも出てまいりましたが、ビクター、エジソン、コロムビア、ブランズウィックはじめアメリカの主要なレーベルを網羅した膨大なデータベースです。レコードのデータはテークごとの録音年月日、それからどのテークがプレスに使用されたかまで記載されておりまして、非常にこれは親切なデータベースなわけです。音源がPDの場合は公開されております。このデータベースの根幹となっておりますのは、サンタバーバラの学術出版でありますGreenwood Pressが発行した各種ディスコグラフィーです。先ほど柳さんが目指しておられた、ああいったディスコグラフィーです。それから、UCSBにはシリンダー・オーディオ・アーカイブもございます。フランスのフォノベースのように、シリンダーをデジタル音源化する設備を持っておりまして、こちらもPD音源を大量に公開しております。

この次はInternet Archiveです。Internet ArchiveもSPレコードのデジタル化プロジェクトを進めております。ボストン公共図書館の所蔵コレクション約5万点を含むたくさんのSPレコードとシリンダーのコレクション、放送録音などのデジタル音源を持っておりまして、現在、実に26万9,126件の音源を視聴可能です。ここの面白いところは、いろんなコレクションがこのInternet Archiveの中にあるんですが、いずれのコレクションのどのテークも、1つのテークについて異なる太さの針で再生した複数の音源が用意されています。だから、1つのレコードでも針の太さによって違う音を聴くことができるというのは大変ユニークなデータベースになっております。ただ、それぞれのコレクションの趣旨にはちょっとばらつきがありますので注意が必要です。

アメリカにもEUROPIANAに準じた横断検索プラットフォームとしまして、Digital Public Library of America (DPLA) というのがございます。欧米では、今挙げましたほかに、大学ですとか公共機関のほかには個人レベルでも大変優れたデータベースがたくさんありますので、そういったデータベースをウェブ上で検索してつらつらと見てみますと感心をします。

次のページ、よろしく願いいたします。

(スライド 5) では、次は日本のデータベースについて述べさせていただきます。

日本で今、最も充実していますデータベースとなりますと、「れきおん」ということになるかと思えます。HiRAC（歴史的音盤アーカイブ推進協議会）がデジタル化した音源を国立

国会図書館が配信するサービスでして、これは図書館に行かないとちょっと聴かれません。ビクター、コロムビア、テイチクといったレーベルが持つ音源とHNKが保存していた放送用録音などから成るデータベースでして、この数字、4万8,732件に見られますように、日本随一の音源数を誇ります。書誌的にはいささか混乱しておりますが、それはちょっと後で述べさせていただきます。ここの特徴は、ビクター、コロムビアの金属原盤ですとか、NHKの放送用録音、通称AK盤というものが含まれるのが大きな特徴で、つまり普通レコードのデータベースといいますと、市販のレコードをかき集めた、そういうコレクションが多いんですけども、こちらは市販のレコードではない、レコード会社ですとかNHKの中にあつたものが聴かれるというのが、ほかのデータベースとちょっと異なるところでございます。

それから、国際日本文化研究センター、日文研では、森川司さんが集めていらした森川コレクションが浪曲SPレコードデータベースとして稼働しております。このデータベースはSUBですとかUCSB式に書誌にレーベル画像、それからレコードのカタログナンバー、マトリックスナンバーと発売データを入れているのが特徴です。

その下の日本伝統音楽研究センターでは、邦楽に特化したデータベースを持っております。こちらにもレーベル画像、それからカタログ番号、マトリックス番号と発売データを入れておまして、PDの音源を公開しております。それに加えて、長唄ですとか民謡などのジャンルですとか、それから複数の吹き込み者がおります場合は、それらの演者が注記として入っているのが特徴でございます。

日本国内のSP盤のデータベースというのはまだあるかと思いますが、ウェブ上で音源を聴くことができる代表的なものといいますと、大体今挙げたような感じでございます。

日本にもEUROPIANAやDPLAに相当する総合プラットフォームとしまして、ジャパンサーチがございました。次のページ、お願いします。

(スライド 6) 次は「今後の展望」というふうに題しまして、ここからはちょっとごく個人的な経験則ですとか見解となりますが、レコードのための書誌づくり、理想的なプラットフォームはどういったものかということをお述べさせていただきます。次のページ、お願いします。

(スライド 7) 私は現在、ボン大学の片岡一郎コレクション・プロジェクトに招聘研究員として加わっております。活動映画弁士の片岡一郎さんが収集したおおよそ3,500枚の映画説明レコードコレクションをボン大学が譲り受けまして、それをデータベースにしようというプロジェクトです。日本・韓国研究のラインハルト・ツェルナー先生と湯川史郎先生が指導しておられます。現在、専任のスタッフを複数持っておりまして、レコードの洗浄、状態の記録か

らラベル・レーベルのスキヤニング、それからデジタル音源化を着々と進めているところがございます。

データベース化に当たりまして、書誌にどんな情報が必要か、多くの情報をどう整理するかが課題となりました。さきに述べましたDAHRその他を参考にしまして、そこに日本のレコード事情をいうのを加味しましてメタデータを作っております。レーベル上の表記とは別に実際の内容、それから、これはボン大学なのでドイツ語の訳というのを入れたりなんかしております。演目、タイトル、原作者や脚色などの作者情報、演者の活動弁士、伴奏の楽団、レコード会社、カタログナンバー、マトリックスナンバー、それから発売データが基本となっておりますので、大阪芸大で今作っているデータベースと大体似たような感じではないかと思いますが、ここにレコードの状態ですとか再生時の状態も記載します。それから私どももSP盤の溝がない部分にあります刻印情報を加えることとしております。次のページをお願いします。

(スライド 8) 刻印からはいろんな情報が読み取れます。情報の塊と言ってもそんなに間違いはございません。そのレコードの録音時期、使っているマイクロフォンの型、テーク数、プレスされた版を示す版数、レコードにかけられた税率を示す刻印、これはほぼ日本独特ですが、そういった従来見過ごされてきたのがこの刻印情報です。

このパワポの背景にうっすら見えます、多分見えると思います。見えますのが、古関裕而作曲の昭和18年「若鷺の歌」のレーベルの外の刻印でございます。左の端にちらっと見えます漢字は「納付済」でして、これは昭和9年に始まった内務省のレコード検閲を受けたことを示しております。この「納付済」があるのとないのとで、すぐにまたレコードの年代が分かるという。それから12時の方向、真上にある連なった数字、左の端のものはテークを示します。

「2」と書いてありますので、この「若鷺の歌」はテーク2です。これがテーク4になったりテーク5になったりテーク6になったり、いろんな人がおりますが、真ん中の記号は、これはプレス用の原盤の版数を示しております。初版のAから始まるんですけども、これはよほどヒットしないと新しいプレス用の原盤を作りません。つまりBには移らないんです。このレコードは「C」ですから、3回原盤を作り替えているということになります。それから次に右端の数字は、プレスされた版数を示します。これを14版いっていますので、やはり大量にプレスされた印です。私が見たうちで一番多かったのは24とか、そんな大きい数字があったと思います。

それから次に、右のほうにございます⑧、丸で囲んだ8の刻印が、これが税率でございます。昭和18年3月、改正物品税法によりまして、レコードに80%が課税されました。戦前はレコ

ードは1枚、標準的な価格が1円50銭だった。この課税によりまして2円43銭にまでなっております。この課税刻印は昭和12年7月の日中戦争以降につくものでして、丸で囲んだトク
の字、その後は丸で囲んだ5、それから⑧と税率が進みまして、昭和19年には⑫とい
ますと、実に120%の課税にまでなるわけです。レコード2枚分以上の値段になってしま
ったわけです。すごくプレスを重ねたレコードといえますと、今言いましたような⑤と
か⑧、⑫というのが盤面に全部盛りで刻印されておりました、盤面が大変にぎや
かなことになります。これによりまして、所蔵版のプレス時期の判定に使えるわけ
です。

ここでボン大学の片岡コレクションに戻りますが、ボン大のデータベースで気を
払いたいの、録音データと発売データです。録音データにつきましては、これまた後述
いたします。発売データにつきましては、実は海外の多くのデータベースは、発売
データを採用しておりません。ほぼ録音年月日を記載するのが主流です。たまに
発売日を録音日と誤って入れている例もございますが、海外ではどうい
うわけか発売の記録には無頓着なんです。次に述べる問題から、片岡プロジェクト
ではこの発売データを統一する、あるいは併記する方向で考えております。
次のページ、お願いします。

(スライド 9) データベースの現状となりますが、日本の多くのデータベースでは、
現状、発売データにおいて新譜月と発売月、発売年月日が混在しております。レ
コードの発売日とい、いますのは、原則新譜月の前の月、雑誌と同じです。新譜
月の前の月ですので1か月変わってしまうんです。この新譜月と発売月の区
別が曖昧であるというのが現在の書誌に共通する問題となります。どちらかを
統一しなければならない、あるいは新譜月と発売年月日あるいは発売月
両方を併記するのが望ましいと思います。混在するのもこれは仕方がない事情
がございます、文献資料などで混在して誤っているのをそのまま書誌に採用
してしまうパターンが多いか、と思います。一昔前の文献資料ですとかレ
コード会社の提供した資料は、そもそも新譜月か発売月かを明記してい
ないものが多かったんです。それから、昔は頻繁に臨時発売、特別発売、
記念発売というのを繰り返しました。こうしたイレギュラーなレコードの
発売日というのは、新聞広告ですとか月報で小まめに追わないと分かり
ません。そんなこんなで正確な記述を記し、難い事情というのがレコード
には横たわっておりました。

次にもう一つ、また「れきおん」を挙げまして恐縮ですが、重複した音源
ということの問題を取り上げましょう。ディック・ミネ・エンド・ヒズ・セ
レナーダスの昭和9年12月発売、ということは昭和10年1月新譜とい
うこととなりますが、有名な「ダイナ」、れきおんには、テイ
チク版です、初出の15073、それから昭和14年に再プレスしたA9、戦
後に再発売した

342の3種類ございまして、この最後の342に関しましては、NHK所蔵のものと、それからテイチクが持っていたものからの音源と2種類、つまり総計4つを同じセッションのダイナが重複しております。

異なるプレス版による音源の重複、それ自体は問題ではございません、事によるとそれぞれテークは異なるかもしれませんから。テイチクという会社は一度に4テーク、5テーク録音して、そのうちの一つを使ったり、それからまた、そのほかのテークをプレスに回したりしておりましたから、テーク違いというのがしばしば見つかるんです。それからテイチクは、戦災によって金属原盤を失っておりますので、戦後の再発売版といえますのは、戦前のレコードから複写してプレス原盤を作りました。342はそうして作られたので、これを果たして同一原盤とみなすか新たなテークと見るかで変わってきます。重複音源にこうした情報の注記があれば、データベースとして充実するのではないかと考えております。

表記の揺れに関しましては、多分レーベル記載を原則としたことで混乱を来しているのではないかと思います。レコードは書籍と異なりまして、レーベル上の記載が多彩にして煩雑で分かりづらいという事情がございます。今挙げた表記揺れもそのために生じるわけですし、この煩雑さがS Pレコードのデータベース化を阻んできた壁ではないでしょうか。

この種目の中に、タイトルの前に管弦楽とかジャズソングとかついたり、あるいはタイトルだけになっていたりということなんですが、れきおんでは、こういったレーベル表記とは別に、実際の内容を注記に入れるようにしております。件名に入っているんですけども、タイトルのほうはちょっと表記チェックが必要なように思われます。

片岡プロジェクトでは、そうしたレコード特有のレーベル上の情報ですとか刻印の入力に特化したメタデータを作って対応しております。端的に言いますと、めちゃくちゃ注記の多いメタデータでございます。何でもそこに放り込めるようにしようということで注文しました。日本では、ウェブ上の音源公開というのはなかなか難しいんですが、現在では各レーベルが自社のアーカイブに目を向けまして、サブスクリプションで過去音源を生かす潮流が出てまいりましたので、将来的にもちょっと「れきおん」を自宅で自在に視聴するというようなことはなかなか壁が高いのではないかと思います。あくまでPD音源がウェブ上で聴けるようになるにとどまるんですけども、それでもレーベル画像と書誌情報を充実させることによって、グローバルに使えるデータベース作りというのが可能なんじゃないかと考えております。次ページをお願いします。

(スライド 10) 将来的にそこで必要となってくるのが、総合的なレコードカタログ、デ

イスコグラフィーの構築でございます。日本の様々なレーベルの情報をまとめ上げたプラットフォームをつくりましたら、そこから国内の各データベースにひもづけすることができます。私は今、片岡コレクションのデータベースとは別に、SP時代に発行された映画説明、映画伴奏レコード、これはご家庭用のフィルムに音楽を乗せるときのために映画の伴奏となるレコードです。それから映画会社専属の松竹ですとか日活の和洋合奏団などのレコードなど、映画関連のレコード全体のディスコグラフィーの整理を進めております。それを作ることによりまして、片岡コレクションが映画説明のレコード全体の中で一体いかほどカバーしているかという範囲が明らかになりますし、それから、ほかのデータベースとの照会も大変容易になります。これを大規模にする形で国内SPレコードの総合的なカタログを作ることができましたならば、データベースの情報量というのは飛躍的に豊かになりますし、情報の統一も図れます。

幸い国立国会図書館の音楽映像資料室がこの10年ほどはレコード資料の充実に大変力を入れておりまして、主立ったレーベルの基本的な情報はここでチェック可能です。それから、現在は数多くの月報類をデジタルコレクションに加えておりますので、お手元でこれまた閲覧可能です。録音データということになりますと、現存するレーベルの協力が必要になってきます。コロムビア、ビクター、テイチク、キングの4大レーベルは戦前から歴史を重ねて現在に至っているんですが、これらのレーベルは録音台帳を保管しております。レーベルのアーカイブの協力を得られましたら、書誌にレコードの録音年月日を加えることが、これは可能なんです。ただレコード会社からしますと、そうした原資料には吹き込み者の会社との契約内容ですとか吹き込み料ですとか、そういった個人的な情報が記載されているということから、資料の一般公開ができないという壁がございますので、大きなプロジェクトからアプローチをしまして、個人的情報に触れない範囲でそういった吹き込み、録音に関するデータの提供が得られればいいなというふうに考えております。

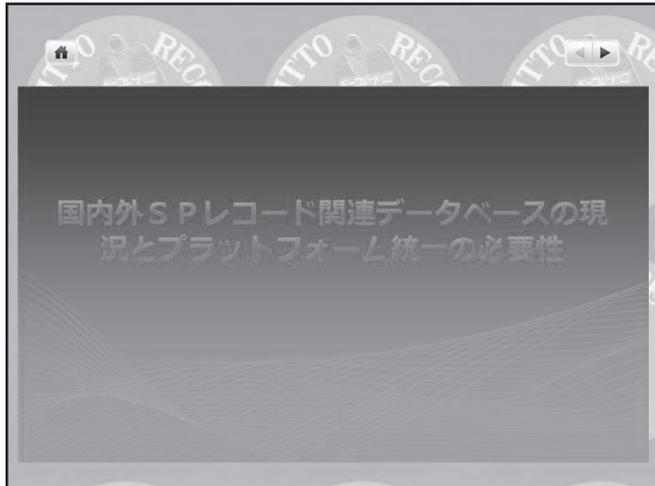
総合的で正確なディスコグラフィー、レコードに特化した書誌のメタデータを作ることで、日本のデータベースを統一するプラットフォームができまして、そうすれば海外のデータベースとも連携を図ることができるのではないか、そういう期待を持っております。

雑駁ながら、これで発表を終わらせていただきます。

○司会 毛利さん、ありがとうございました。

1つお聞きしたいんですが、サイトで聴ける音源というところで「PD音源」というご発言があったんですが、これはパブリックドメインということですか。

○毛利 はい、パブリックドメインでございます。権利の切れた音源のことです。



1



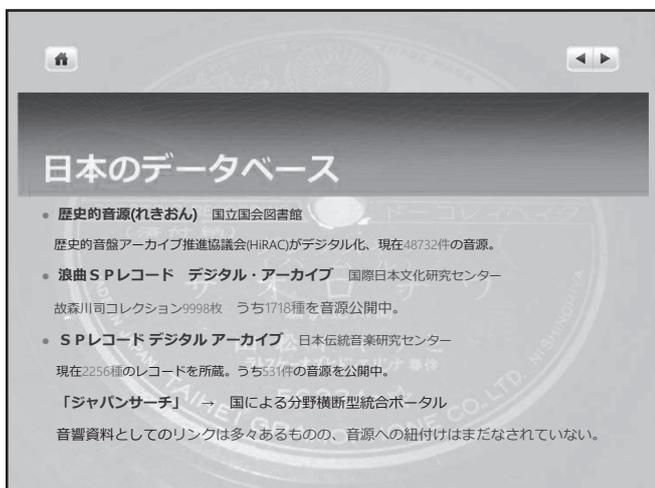
2



3



4



5



6

ボン大学の取り組み

- 片岡一郎コレクション・プロジェクト 7100面(およそ3500枚)
- レーベルの書誌情報に加えて、盤面の刻印をデータ化。音源の音質の評価を標記する
- 発売データを新譜年月 or 発売日に統一し出典を添える
- 片岡コレクションとともに映画説明/映画関連レコードのディスコグラフィを作成

7

書誌に記載するデータ

- レーベル上の情報
 - 種目・タイトル・作者(作詞・作曲・編曲・脚色など)・演者・演者2(楽団など)・レーベル名・商品番号(=カタログ番号)・原盤番号。
- 盤面(無音溝部)の刻印情報
 - レコードそのものの情報。
 - テイク数、版数、税率、プレス時期などが示される。

8

データベースの現状

- 発売データの不統一(新譜月と発売月の混在が非常に多い)
- 音源の重複(プレス時期の異なる同一原盤の音源が含まれている)
 - 使用レコードについての書誌が不十分(初出・再発などの情報不足)
- 標記の揺れ
 - 種目(管弦楽、ジャズソング等)がタイトルに含まれていたりいなかったり。
 - レコード番号と原盤番号の混在
- Web上での音源公開には著作権、専属権などの壁がある。

9

将来的には

- 統合的な国産SPレコードカタログ(ディスコグラフィ)のプラットフォームが必要なのではないか?
- テイク、録音年月日、発売新譜年月あるいは年月日といったデータの補完。
- 海外のプラットフォームとの連携

10

II-3 SP レコードを受け継ぎ活用するということ—所蔵館調査と九州大学総合研究博物館での取り組みをもとに—

○司会 3人目は、九州大学総合研究博物館専門研究員の久保真利子さんから「SP レコードを受け継ぎ活用するということ—所蔵館調査と九州大学総合研究博物館での取り組みをもとに—」ということで、これも ZOOM を介したオンラインでお話をいただきたいと思います。久保さんのプロフィールにつきましても、事前にお配りしたテキストをご覧ください。

それでは、久保さん、よろしくお願いします。

○久保 九州大学総合研究博物館の久保と申します。本日はどうぞ宜しくお願い致します。画面をパワーポイントに切り替えさせていただきます。

ただいま紹介いただきましたように、私は九州大学総合研究博物館（以下、九大博物館）という所に所属しております。福岡市東区の「箱崎キャンパス」の中にあります。ここに、約4万枚の SP レコードを所蔵しているわけですが、外観はこのようになっております [スライド 2]。非常に雰囲気のある非常に「映（ば）える」スポットとなっております。

本日は、このような流れで進めさせていただきます [スライド 3]。最初に九大博物館の SP レコードについて、所蔵や活用の現状についてご紹介します。そしてこのたび実施した「SP レコードの全国所蔵館調査」の結果について共有させていただきたいと思います。そして最後に簡単にまとめをさせていただきます。

最初に九大博物館の SP レコードについてです。

まず所蔵庫を見ていただきたいと思います [スライド 5]。決して良い収蔵環境だとは言えません。SP レコード専用の棚があるわけではなく、段ボールを積み上げて収蔵しています。一つの箱に 50 枚くらいの SP レコードを横積みで保管しており、このような箱が 998 箱あります。

現在、九大博物館には 4 万枚の SP レコードを所蔵しておりますが、旧蔵者は田村悟史という方です [スライド 6]。田村は、ドキュメンタリー映像作家や地域活動家など、様々な顔をもつ人物ですが、1993 年ころ福岡県中南部の東峰村に移住し、旧宝珠山中学校を拠点に、「手仕事舎」という組織の面々とともに様々な文化活動を展開しました。そして 2014 年に、田村が生前収集した SP レコードをはじめとした文化活動の記録物一式を、九大博物館が寄贈を受けました。

田村悟史コレクションの全貌ですが、大きく 5 つに分けられます [スライド 7]。そのうち SP レコードや蓄音機は、現在赤で囲んだ (4) と (5) の位置づけになります。つまり、九大博物館が寄贈を受けた SP レコードの最大の特徴は、田村が展開した「地域活動資料のひとつ」に位置づけられるということです。(4) にありますように、大型蓄音機についても 3 台寄贈を受けています。これは田村が旧宝珠山中学校で設置していたときの様子です [ス

ライド 8]。ここに蓄音機が 3 台あるのがわかります。そしてここにお客さんを沢山入れて SP レコードのコンサートを長年にわたって非常に定期的に行っていたようです。そしてこれは現在、九大博物館にある田村旧蔵の蓄音機です [スライド 9]。4 階の大会議室という場所に置いています。このように、田村からは SP レコードだけではなく蓄音機を含む非常に多くの資料を受け入れたのですが、受け入れの条件として「死蔵」をさせないこと、つまり「活用をする」ことという事が条件だったと聞いています。

そこで、SP レコードについては、九大の関係者を中心とした 4 名で、「箱崎 SP レコード研究会」というものをつくって、それぞれの専門分野を活かしながら、SP レコードコンサートなどを定期的に行っています [スライド 10]。そして、それぞれが九大博物館の紀要に論文を投稿するなどして、地道に活動を展開しています。チラシの一部を紹介します。SP レコードを始めた頃のもので [スライド 11]。そしてこれは最近の活動のチラシになります [スライド 12]。

次にリストの現状についてご説明します [スライド 13]。田村はすでに SP レコードのリストをエクセルで作っていました。これも寄贈を受けたわけですが、ジャンルごとに分類し、田村独自のルールで「整理番号」というものを振って整理をしていました。

整理番号の規則が左の図のようなものになります [スライド 14]。「SP」からはじまる 10 ケタの番号には、左に示したような規則があることが分かりました。そして、リストをもとに、ジャンルごとの所蔵面数をはじき出したのが、右側の表になります。面数でいうと、83,120 面あることが分かりました。ただこれは、リスト上の面数になります。全てが両面盤と仮定した場合、これを半分に割ると枚数になるかと思うのですが、片面盤などもありますので、現物と照らし合わせないと所蔵枚数が確定できないという状況です。そしてリストを分析してわかったことは、非常に間違いが多いということです、またファイルごとにリスト化した人が違うらしく、詳細度がファイルごとに違っています。またジャンルの揺れに全く対応できない様なデータになっているという欠点も見えてきました。

そのほか繰り返しになりますが、九大博物館の SP レコードは田村が展開した地域資料の一つとして寄贈されていますので、その特性も今後の公開するデータベースには追記していきたいなと思っています。

ここではスリーブの書き込みから一例を紹介します [スライド 15]。左側のスリーブの下半分に、少し見えにくいかもしれませんが、鉛筆書きで、「2011 年 3 月 6 日」の SP レコードのコンサートでこの盤面を使用したという記述が見えます。また、右側ではこの盤を田村が「貴重盤」として判断していたことという事がわかります。これらは旧蔵者である田村の活動実態を知り、後世に伝えるためには重要な資料だと考えられます。今後公開するレコードリストには、この様な書き込みを含めたデータベースの完成を目指したいと思います。

また、オリジナルのスリーブや歌詞カードについてもレコードとは別で保管をされました [スライド 16]。将来的には可能な限り、レコード本体と紐付けたデータベースを完

成させたいと思っています。

そして、すでにリストがあるにもかかわらず手直しが必要だという事が明らかとなりましたので、補助スタッフを使い雇用し、盤面スキャンを行いながら、データの見直し作業というものを始めています [スライド 17]。

以上のような見直し作業に何時間かかるか、何人必要かを弾き出したのがこの図になります [スライド 18]。九大博物館准教授の三島先生が、試算をして下さいました。とにかくデータベースを公開するまでには、時間も人材も、そして資金も必要になるわけですが、SPレコードを持っている機関は、どこも同じ様な問題に直面しているのではないかとといった単純な疑問が生まれます。ただ、SPレコードは大量生産品なので、同定するのは難しくないのではないかと考えました。またどの機関がどのようなSPレコードを持っているか、現状の日本においては不明なのが実態です。

そこで、データ入力の省力化や、何処にどのような盤があるかを把握できる横断検索というものを目指しながら、「SPレコードの統合システム」について模索してみようということになり、2017年くらいから、日本国内の主要な所蔵館に対し電話によるヒアリングや現地視察などを重ねてきました。そこでの知見を活かして、今回アンケート調査を行うに至りました。

ここからは、その調査結果について、ほんの一部になりますが、発表させていただきます。

現時点で所蔵が確認できたのは、全国で49ヶ所です [スライド 20]。本日最初にご講演いただいた柳さんにも細かく教えていただきながらリストをアップしました。全国に散らばっているのがわかります。この他にもまだ所蔵機関があるかもしれませんので、ご存知の方いらっしゃいましたら是非ご教示いただけたらと思います。

アンケートの概要はこのようなになります [スライド 21]。インターネットなどの情報を頼りに連絡先を把握できた機関に対してアンケートをお送りし、協力いただきました。本日までご参加の方の中にも、アンケートにご協力いただいた方がいらっしゃいます。この場を借りて、ご協力に感謝申し上げます。

さて、アンケートの質問骨子ですが、大きく6つに分けて質問しました。ほんの一部ですが、次からはその結果について共有をいたします。

まず「2.基本情報」の中でSPレコードの所蔵枚数を把握していますか?という質問をしました [スライド 22]。「完全に把握している」が18%、「大体把握している」が76%です。あわせると全体の9割以上になります。「少しは把握している」「全く把握していない」という選択肢も用意をしていたのですが、それらの回答は一つもありませんでした。日本における所蔵館のほとんどは、所蔵するSPレコードに対し何らかのアプローチを加えているという事が確認できました。

その次の質問で、把握できている所蔵枚数をお答えいただいたのですが、現時点で、1,000枚以上の所蔵が確認できた機関は、全部で26カ所ありました [スライド 23]。最も少ない所で、65枚という機関もありました。私自身がまだきちんとデータを得ていないため、恐

らく 1,000 枚以上持っているであろう機関もありますが、この表には含めることができていません。また、この表は現時点（注：2020 年 11 月 21 日）のもので、とくに個人コレクターの寄贈受け入れの状況によって、刻々と変化していくものだと考えられます。

次に、質問 3 では、整理や保管についてお聞きしました [スライド 24]。質問の 3-1 で、レコードの置き方について教えていただきました。そうしましたところ、横置き、縦置き、そして縦横混在という機関が大体 1/3 ずつくらいになっているということがわかります。

その次の自由記述欄で、整理や保管について疑問に思っていることを教えて下さいと聞いたところ、「割れたりひびが入ったりしたレコードは、どのように扱っているかを知りたい」ということや、「盤面のクリーニング方法について知りたい」という意見が寄せられました。また、「適切な保管方法について」の質問もあり、具体的には「横置きなら何枚までが適切なのでしょうか?」という様な質問もありました。「SP レコードの扱い方」といったような、マニュアルやまとまった文献があるわけではないので、私もそうなのですが、日々 SP レコードに接する中で疑問に思うことは非常に多いわけです。多くのことは、「諸説あり」というような状況かもしれませんが、このアンケート結果をみて、情報共有の必要性、すなわち所蔵館同士の「横のつながり」について考えさせられました。

それでは次に、目録化の現状及び公開についてです [スライド 25]。質問の 4-1 では、「目録化をしていますか?」と質問しました。「完了している」「進行中」と答えた機関をあわせると、全体の 70% ぐらいになります。統一フォーマットが規定されていない中、各館が独自のスタイルで目録化をすでに進めている、あるいは完了しているということがわかります。また質問 4-5 において、データの公開について聞いたところ、現時点で公開しているという機関は 29% にとどまっており、今後も「公開しない」と言った機関が 10% あるということが注目すべき点だと思います。

次に、質問の 5 においては、SP レコードの活用状況についてお聞きしました [スライド 26]。「活用している」という機関が 67% あり、所蔵をしているだけで何も活用していないという状態の機関が少ないという事がわかります。質問 5-2 ではその「活用の方法」について具体的に教えていただいたのですが、レコードコンサートというものが非常に多く、ついで館内視聴や研究活動という結果となりました。その他として挙げてくださった機関の多くは、SP レコードを用いた展覧会を開催したという意見が多かったです。また、コロナの影響で、館内視聴を控えたといった回答や、レコードコンサートの回数を減らしたなど、レコードの活用を取り巻く状況にもコロナが影響しているということも確認できました。

そして「6.その他」の質問として、SP レコードを保管・整理・活用するための、人材や資金や知識、これらは十分ですかという質問をしました [スライド 27]。結果、「十分に確保できている」と答えた館はゼロでした。その一方で、「十分とはいえない」「全く足りていない」という館を併せると、全体の 80% を超える結果となります。日本国内の所蔵館のほとんどが、充実した環境を得られていないことがわかります。

さて最後になりますが、「SP レコードの統合システムについて関心がありますか」という

質問についての結果をご紹介します。「統合システムというものを模索していますが、関心がありますか？」との問いかけに対し、「非常に関心がある」「やや関心がある」と回答した方は、併せて59%でした [スライド 28]。その方々の意見としては、データ入力の省力化に関する期待が多く寄せられました。ただし、これは目録化が完成していない機関に限った意見ですので、そこには注意が必要です。また、更なる活用を目指したい機関からは、音源の特性、作者、演奏者などに関する包括的なデータ集やリンク機能を備えた「総合的なデジタルアーカイブ」を求める声もありました。その他、音声を公開する際の著作権処理について大きな壁を感じている機関も多く、そのような機関からは、発売年月日の記載を望む声が非常に多くありました。因みに著作権処理の参考にするためには、演奏者の生没年などについても記載する必要があるのではないかと考えています。

次に、統合システムに「あまり関心がない」「全く関心がない」と回答なさった方々の意見です [スライド 29]。それらの方々の意見としては「他の業務で手が回らない」という現場ならではの意見や、SP レコードの視聴回数がどんどん減っていているため、今後も活用が見込めないものに時間や手間を割きたくないという、またこれも現場の意見を聞くことができました。また、「すでに独自のルールでデータ化をしている」という意見や、「すでに公開をしているため、これ以上変更したくない」という意見もあります。より多くの所蔵機関を巻き込んだ形での「統合システム」を実現していくためには、この辺りが障壁になるのではないかと考えました。

さて最後になりますが、簡単にまとめます [スライド 31]。

SP レコードを受け継ぎ活用するという事は、決して容易なことではないと思います。SP レコード独自の特性として保管場所が非常に多く必要になってくるとことや、重い上に破損の恐れがあるということで扱いについても注意が必要です。また、活用頻度の減少ということもあり社会的な必要性の低下により、なかなかモチベーションが上がらないということもあるでしょう。したがって所蔵館同士の連携によって知恵や知識などを共有しながら、「みんなで日本全国の SP レコードを受け継ぎ活用する」という考えがあってもいいのではないかと考えます。それを実現させるための一方策として、「SP レコードの統合システム」というもの提案をさせていただきたいとします。

最後になりますが先ほどの発表で毛利さんが具体的にお話をいただきましたプラットフォームの統一というものは横断検索実現のためには必須だと思います [スライド 32]。毛利さんのお考えに非常に賛同いたします。また相反することではありますが、各館のコレクションの特徴や独自性を反映できるようリスト化というものも、一方では進める必要があると思います。

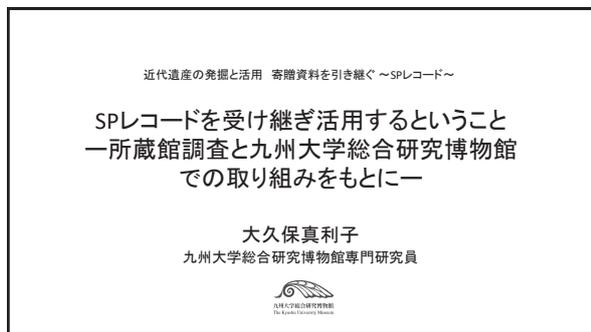
ここまでは「所蔵目録」の話になるのですが、今後日本における SP レコードの総合的なディスコグラフィというものを考えると、ジャンル別やレコード会社別で作られている「販売目録」も含めた形を目指したいとしますし、海外サイトとの連携などを含め全世界的なディスコグラフィの作成というものが期待されると思います。将来的には個人コレ

クターも参画していただけたらいいなとか、レコード会社の協力を得ることができればいいなと夢見心地で思っていたのですが、先ほど毛利さんの発表を聞きまして、実現可能かもしれない！と思い非常に力強い思いがいたしました。

以上になります、ご清聴ありがとうございました。

○司会 大久保さん、ありがとうございました。

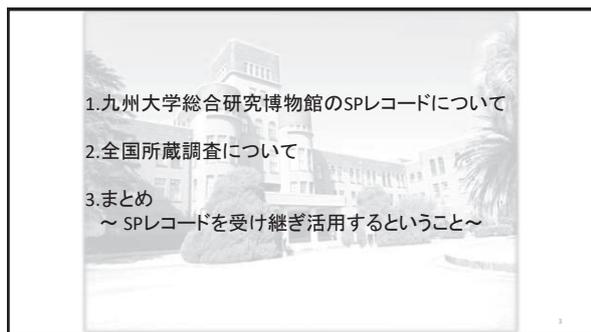
それでは、ここで約10分間の休憩をはさみたいと思います。チャットによる質問の受付は、ここまでとさせていただきます。ありがとうございました。座談会の開始は、15:20から行います。それまでの間、しばらく休憩させていただきます。よろしくお願いいたします。



1



2



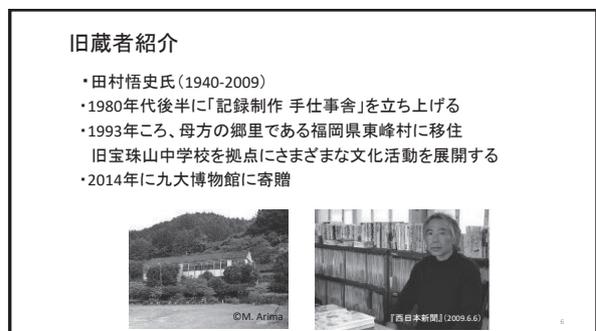
3



4



5



6

田村悟史コレクション

- (1)芸能関連調査・記録資料
- (2)地域記録資料
- (3)映像制作に関わる機材
- (4)SPレコードと蓄音機
- (5)文化活動実践記録

(三島 2018)



7



8



9

**九州大学総合研究博物館
「箱崎SPレコード研究会」のメンバー**

	総合研究博物館 三島美佐子 (准教授)		元人文科学研究院 京谷啓徳 (元准教授)
	総合研究博物館 大久保真利子 (専門研究員)		芸術工学研究院 大久保真利子 (准教授)
	植物系統学 博物館学		西洋美術史
	日本音楽学		演劇学

10

九州大学総合研究博物館 28年度公開講座

SPレコードと蓄音機の魅力

—田村悟史コレクション初披露目—

2017年2月4日(土)

13:00~17:30 (自由参加)

九州大学総合研究博物館 3階 大講義室

九州大学総合研究博物館 ミュージアムカフェ

音楽と美術の夕べ

「箱崎山コレクション」SPレコード音源集上演

青山雅弘「九州大学文学部」特別講演

【第1回】2016年10月21日(木)

15:00~20:30

【第2回】2016年11月18日(木)

15:00~20:30

九州大学総合研究博物館 ミュージアムカフェ

11

九州大学総合研究博物館 28年度公開講座

名月のしらべ

—「箱崎山コレクション」SPレコード初披露目—

18日 9月23日(土) 13:00~17:30

20日 10月7日(土) 13:00~17:30

九州大学総合研究博物館 3階 大講義室

九州大学総合研究博物館 28年度公開講座

スペシャル講演 & SPレコード上演会

2019年5月26日(日) 15:00~17:00

スペシャル講演
大学がSPレコード・コレクションを所有
「箱崎山コレクション」SPレコード音源集上演
青山雅弘 九州大学文学部 特別講演

SPレコード上演会
田村コトシロ 九州大学総合研究博物館 特別講演
大久保 真利子 九州大学総合研究博物館 特別講演

12

資料種別	種別								
SP0000	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0001	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0002	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0003	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0004	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0005	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0006	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0007	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0008	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0009	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0010	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0011	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0012	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0013	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0014	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0015	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0016	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0017	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0018	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0019	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0020	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0021	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0022	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0023	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0024	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0025	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0026	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0027	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0028	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0029	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0030	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0031	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0032	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0033	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0034	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0035	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0036	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0037	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0038	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0039	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0040	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0041	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0042	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0043	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0044	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0045	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0046	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0047	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0048	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0049	100	100	100	100	100	100	100	100	100
SP0050	100	100	100	100	100	100	100	100	100

13

資料作成時における作業量

ファイル名	下位分類	冊数
種目		2,924
種別		2,919
小種別		4,264
分次		114
分次種別		475
種目本部		1,234
種目種別		475
種目本部		1,867
種目種別		1,026
種目		2,307
種目種別		1,591
種目		417
種目種別		1,061
種目		317
種目種別		574
種目		140
種目種別		192
種目		604
種目種別		343
種目		14,454
種目種別		10,254
種目		1,472
種目種別		1,464
種目		1,026
種目種別		1,957
種目		399
種目種別		4,324
種目		3,728
種目種別		406
種目		3,244
種目種別		2,857
種目		714
種目種別		2,857
種目		111
種目種別		1,111

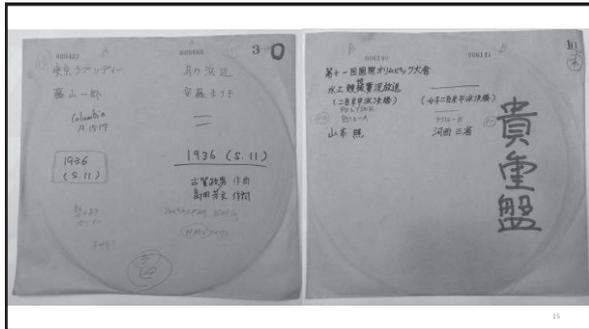
田村独自の番号の付け方

SPOQ × × △△△△

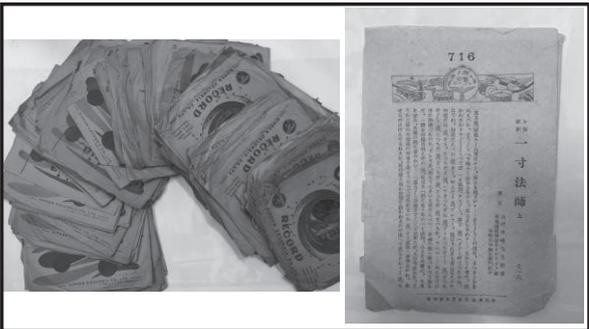
↓ 下位分類 ↓

ファイル名 通し番号

14



15



16

【画像化】

九大博物館所蔵 約 80,000 タイトル

※ 写真 約 30 万点

※ 上記のデータはすべてによる 優のスキニング (100%)

洗淨

後片整理・収納

【ラベル情報データ化】

ラベルの記載情報と マジックナンバー (QR) の 修正・追加入力

【データチェック】

重複データの整理

データセットを協力館に送付 関係データ情報データ

【データ分析 & コンテンツ分析】

（作成：三島）

17

事前調査に基づく作業効果

【画像化】

50 枚 (100 冊) / 2.5hr

すなわち、100 冊 (200 冊) / 日 5hr

× 1 ヶ月 (20 日間)

⇒ 2 千枚 (4 千冊) / 月 (100hr)

約 4 万枚の画像に要する期間は 約 6 万 8 千枚のデータ化に要する期間は

【情報データ化】

20 冊 / 1hr

すなわち、100 冊 / 日 5hr

× 1 ヶ月 (20 日間)

⇒ 2 千冊 / 月 (100hr)

⇒ 九大博物館所蔵の SP 管理情報

約 8 万 8 千冊のデータ化に要する期間は

【データ入力】

20 ヶ月

40 ヶ月

1 日 5 時間 × 20 日間 / 月の補助者を 2 名雇用すれば 1 人あたり 30 ヶ月の作業で、九大博物館所蔵 SP 約 4 万枚のデータ化が完了

（作成：三島）

SPLレコードは大量生産品なので、周定するのは難しいのでは？

どの機関がどのようなSPLレコードを持っているか不明…

SPLレコードを持っている機関は、どこも同じ問題に直面しているの？

データ入力の省力化+横断検索

「SPLレコードの統合システム」について模索してみよう！

18



19



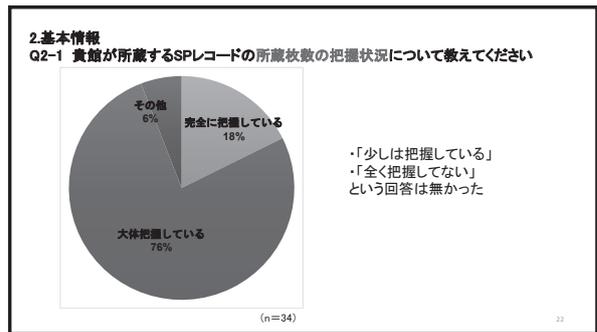
20

アンケートの概要

- 実施機関: 10月27日～11月10日
- 実施方法: GoogleフォームもしくはExcelに記入
- 送付数: 47機関
- 回答数: 34機関 (72%)
- 質問骨子
 1. 基本情報
 2. SPLレコードについて
 3. 整理・保管について
 4. 目録化および公開について
 5. 活用について
 6. その他

Googleフォームのサンプル

21



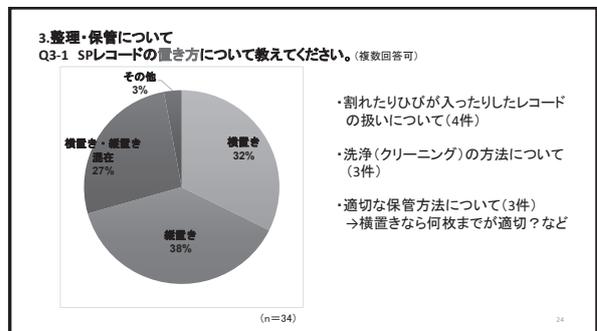
22

1,000枚以上の所蔵が確認できた機関

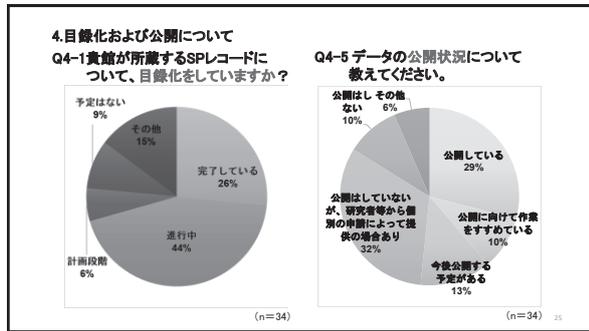
順位	施設名称	所蔵数(枚)
1	一般社団法人 日本書業振興会 ※1	約200,000
2	大阪芸術大学博物館	約100,000
3	新沢町レコード館	76,567
4	金沢工業大学PMG	約50,000
5	九州大学総合研究博物館	約40,000
6	昭和館	約36,000
7	東京芸術大学附属図書館	約25,000
8	株式会社 熊本放送	約20,386
9	大阪府立上方演芸資料館	約10,300
10	香濱博物館 ※2	約10,000
11	東京大学総合研究博物館	約10,000
12	野村裕堂・あらえびす記念館 ※2	約10,000
13	早稲田大学坪内逍遙記念演劇博物館 ※3	約9,000
14	株式会社 魚の井沢 ※2	約8,000
15	国立劇場	約7,100
16	国語学術研究所	約6,700
17	石川県立歴史博物館	約5,400
18	民衆芸術大学 美術館・図書館	5,023
19	神戸市立中央図書館	約4,500
20	国立文楽劇場	約4,329
21	京都府立芸術大学 日本伝統音楽研究センター	約3,524
22	熊本博物館	約3,000
23	一般社団法人 堀江オルゴール博物館	約2,900
24	民衆音楽博物館	約2,600
25	金沢工業大学PMG	2,518
26	福岡市博物館	約1,302

※1 公式サイトからの情報
 ※2 電話による取材
 ※3 現地視察時にヒアリング

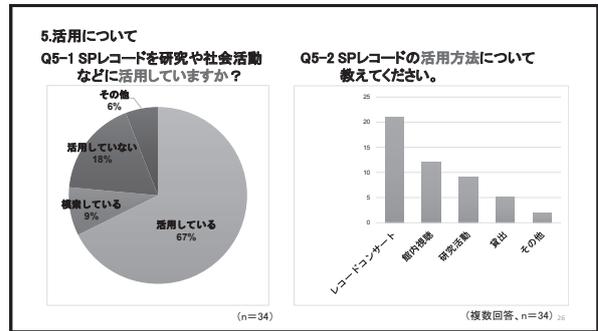
23



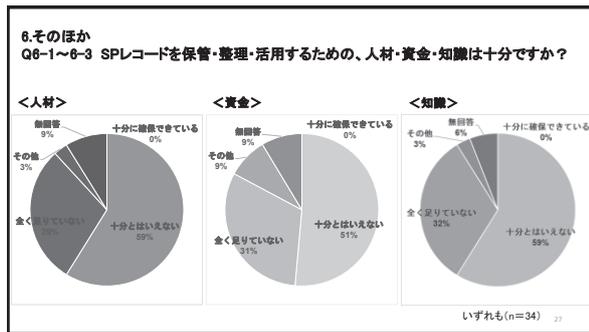
24



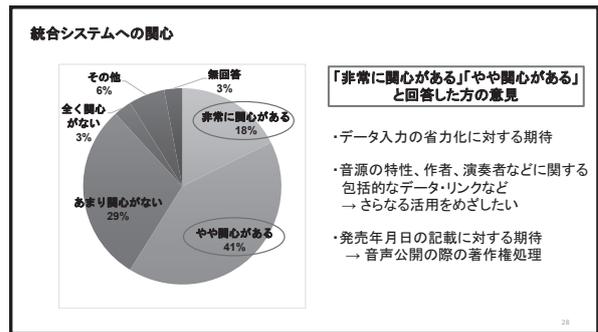
25



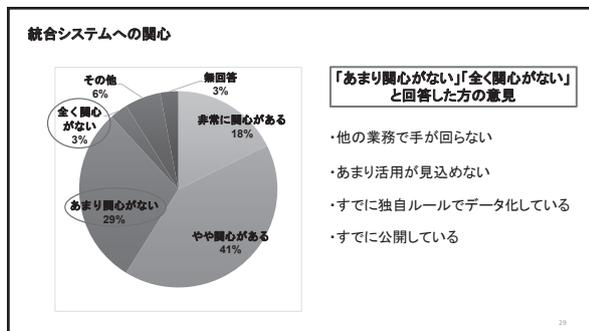
26



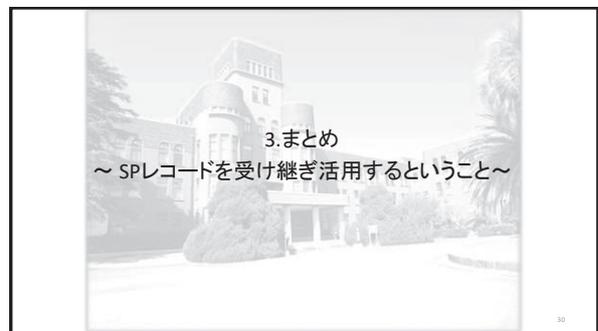
27



28



29



30

「SPレコードを受け継ぎ活用すること」は
決して容易なことではない
(保管場所、重い、破損の恐れ、活用頻度の減)



所蔵館同士の連携によって
知恵や知識などを共有しながら「受け継ぎ活用する」
SPレコード統合システム

31

31

- ・横断検索の実現のためには、プラットフォームの統一は必須
- ・各館のコレクションの特徴を反映できるようなリスト化も重要
(例: 九大博物館であれば旧蔵者である田村の足跡の記録)
- ・発売目録、ジャンル別・レコード会社別のディスコグラフィ、
海外サイトとの連携
- ・将来的には個人コレクターも参画
- ・将来的にはレコード会社の協力を得る

32

32

ご清聴ありがとうございました

33

33

Ⅲ <第三部>座談会

○司会 それでは、第三部の座談会を始めたいと思います。

座談会は、講演していただきました3名のパネリストの方と寄贈資料の受渡しをいたしました3大学、大梶さん、小口さん、そして私を含めた6人で進めたいと思います。

まず最初に、パネリストの方から、他のパネリストの講演を聞いて思ったことなどについて、簡単にお話しいただきたいと思います。

それではまず、柳さんからお願いいたします。

○柳 そうですね、やはり大久保さんのお話ですね。特にアンケート調査のことを伺いますと、各現場で困っていること、これはもう痛切に私自身も感じていたことですので非常によく分かる。その中でそれを解決する方法として、やはり毛利さんの言われる統一プラットフォームというのは大変重要だなということに改めて気がつかされたというところになります。さらにこういうことを進めていければというふうに思っておりますが、毛利さん、いかがでしょう。

○毛利 私も大久保さんのお話を伺いまして、所蔵館同士の連携によって受け継ぎ、活用していくというのは大変共感を持ちました。SPレコードの統合システムというものの必要性というのはさらに高まったなという、自分の中で大きなものになったなというふうに思います。

それから、どこのレコードを所蔵している機関の方々も、やはり皆さん、抱えている問題というのは大体同じようなところに落ち着いてくる。それはやはりこの連携で情報を共有していくのがよろしいのかなというふうに思いました。

○司会 大久保さんはいかがでしょう。

○大久保 SPレコードを所蔵し活用していく第一歩目というのは、やはりデータベースなんですね。それは揺るぎない事実だと思うんですけども、しかし、データベース化は非常に苦行です。しんどいです。それをいかに意味づけして、そこに大きな価値を見いだすかということ、今回非常に大きく教えていただいたのではないかと思います。

社会的に、文化的に取り組む、役立つという意義があれば、今後、既に完成しているデータベースであっても、もう少しブラッシュアップしていこうとか、まだ完成していない機関だと、こういうところを詳細に取っていくとすごくいいリストになるんだな、今後役に立つんだなということがあれば、それがモチベーションとなって、非常にいいリスト化が進めていけるのではないかと、私自身も嫌々やっていた経験からそう思いました。

○司会 ありがとうございます。

それでは、大梶さん、小口さんはいかがでしょう。

○大梶 少しそれるかも分かりませんが、私どもの校舎、今から25年前の阪神大震災で被災しまして、SPレコードの棚が転倒したりとか棚から飛び出したりしたこともございました。ですので、まず保管環境も心に置いていただければと思います。

○司会 小口さんはいかがでしょう。

○小口 パネリストの皆さんから非常に貴重な情報をたくさんいただいてありがとうございます。でも、逆に自分たちがどれだけ分からないまま作業していたのかというのをひしひしと感じて、かえって不安になる部分もありましたので、本学でも柳さんが退職されてから専門家がいないうちで作業を手探りで進めていて、やっぱりよその館の方々の協力関係を、今回大学ネットワークで関大さんとの連携というのを一歩としてやったわけですが、まだまだやっぱり難しい部分もあって、今後いろんな館の方と協力関係を築くことができればいいなと強く思いました。

○司会 ありがとうございます。

関西大学からは、先ほどの説明と少しかぶるかもしれませんが、今年度の作業についての感想をお話させていただきます。今年はコロナということで、大学も4月、5月は立入禁止ということがありましたので、実際に学生さんを使って整理作業や入力作業をすることについては、非常に苦労しました。人の手配がなかなかつかないということも苦労したんですけども、集めた人についてもレコードを扱うのが初めてという人がほとんどでして、まず持ち方が分からないとかというようなこともありました。スキャンする時に縁が欠けているレコードがあったりとか、レコードの取り扱いに苦労いたしました。

それから、レーベルにつきましては、例えば昭和の初期までのものだと、日本語が右書きということなんです。普通の左から書いているのではなくて右から書いている字を「どう読むんですか」とか、古い漢字を「どう読むんですか」「どのように入力するんですか」というようなことで非常に苦労したのを覚えております。今、データベース化するには、先程の講演でも、今となっては分からないことというのがありましたけれども、そういうことがあったというのが、今年度活動しての感想であります。

それでは、続きまして、一般の方からいただいた質問に関しても少し触れながら進めていきたいと思っております。時間の関係で、全ての質問には答えられないかもしれませんが、よろしくお願ひしたいと思っております。

まず、事前の質問項目を大きく2点にまとめて挙げました。

まず1点目は、各館での整理の状況ということで、現在の状況についての質問です。「SP

レコードはどのように分類されているのですか。また、その規則について知りたい」、それから「他館での整理・分類方法や利活用についての状況を教えてほしい」などの質問がありました。分類といいますのは、音楽でいいますとジャンルということになるのかもしれませんが、整理や保存についての質問、そして利活用、これは音源利用だけではなくて、社会状況などでの活用ということにも触れていきたいと思っております。

では、柳さんからお願いいたします。

○柳 分類ということを考えていきますと、よくレコードの分類といいますと、その中身、音楽のジャンル分けということ意識しがちなんです。ところが、音楽のジャンル分け、じゃ、何か規則があるのかというと、これは全くないと言っていい。特にレコードの場合、その作られた年代とか社会状況によりまして、レーベルに記載されている文言も千差万別ということもあります。

私自身が携わったときに非常に参考になりましたのが、先ほどから何度も出ております、D AHRというアメリカのUCSBさんのサイトでの仕分方なんですけれども、あえて音楽的な分類の仕方はされていません。どういうやり方をされているのかというと、そのレコードにどんな方法で収録されているのか、歌なのか器楽演奏なのか、そして伴奏につきましては、オーケストラでこんな楽器編成のオーケストラであるとか、ピアノだけの伴奏であるとかといった中身について、文言で示されているわけです。例えば歌謡曲であるとかジャズであるとか、そういった分類の仕方というのは、基本的にはされていなかった。それでこのやり方があるというのに気がついたわけです。思い立ったといいますか、そうだ、こういう方法があるんだと。だから、あえて音楽的なジャンルの分類の仕方というのをする必要はないんじゃないか。その分類については、レーベルに記載されているものはそのままそのレーベルの記載事項として認識していく。そして、活用していくときに、それぞれ活用する方がこういった内容ですよということを伝えていけばいいのかなというふうに思ったわけです。

このあたりのところ、分類ということについては、毛利さんが大変苦労されているところでもあると思うんですけれども、毛利さん、いかがですか。

○毛利 データベースのありがたいところ、特にウェブ上のデータベースのありがたいところといいますのは、使い手が求める情報が検索によって出てくるというのがございます。今、柳さんがおっしゃったとおり、レーベル上の情報、それから実際に録音されている内容、ピアノとバイオリンであるとか、そういった実際の内容等を記録することによって、使い手が自分だけの分類をすることができるというのがデータベースじゃないかなというふうに考えておりま

す。

○司会 ありがとうございます。

まとめの大久保さんに行く前に、関西大学の例を示させていただこうと思います。本学には今現在、大きく3つのコレクションがあります。その3つはそれぞれ収集した方の思いが籠もっているといいますか、先ほども説明のところでしたけれども、それぞれの方が既に分類されたリストも含めて頂いております。ですから、関西大学のコレクションはコレクターの想いを尊重してコレクションごとに分類の仕方が違うというのが実情です。それでもパソコンで検索すれば何とかかなというような状況かなと思っています。

では、大久保さんからお願いしたいと思います。

○大久保 発表では時間の都合で紹介出来なかったのですが、全国の所蔵館アンケートによって、「どのように分類していますか」という質問もしています。その結果を見ますと、非常に多岐にわたります。ジャンル別、受入れ順別、演奏家別、レコード会社別、いずれも複数回答で回答していただいています。複数チェックをしていらっしゃる人もいますので、なかなか統一した分類というのができていない現状が見えます。

私自身も九大博物館がジャンル別になっているので、ジャンルの揺れに対応できないデータベースというものの使いにくさは非常に痛感しております。なので、たとえばキーワードなどを追加して揺れに対応できるようなデータベースにしていくという形で改善する必要があると思うんですけども、アンケート結果を見ますと受入れ順という機関が比較的多いんです。なかなかジャンル分けとか整理の仕方というところにあまり気が回っていない、まだそこまで興味がない所蔵機関も実はあるのかなという印象を持っています。

○司会 そうですね。利活用というところになると、やはり使いやすいデータベースというのが良いですね。もう一つ、利活用について、柳さんからお願いできますでしょうか。

○柳 実際に活用ということ、先ほど大久保さんのアンケート結果にも出ていましたけれども、レコードコンサートが非常に多い、ということは、実際に蓄音機なり、あるいは電気再生装置なりでレコードをかけて聴いていただくということ、そのこと自身は、音楽を楽しむ、あるいは昔の音の記録を楽しむということについては非常にいいことだと思うんですけども、なかなかこれも難しい面も多々あるかと思っています。やはりSPレコード、蓄音機を鉄針あるいは竹針でかけると必ず摩滅していきます。消耗品としての意味合いというのは非常に大きい。でも、保存もしていかなきゃいけない。これのあんばいをどういう具合にするのかというところがあります、けれども、SPレコード、かつてたくさん作られた、恐らく量としては膨大

な量が世界中にまだ残っていると思います。ですから、そういった量をもって保管していくという方法も一つあるでしょうし、アーカイブ化ということも出てくるかと思いますが、やはりアーカイブ化になりますと、これまた後で問題に出てくると思うんですけれども、著作権の問題ということも非常に大きいかと思います。

それと、実際にその活用をしていく上で、レコードそのものを扱うということになりますと、ちょっと話戻りますけれども、レコードの分類、レコードの特質に合わせた分類という、これも必要だと思うんです。私の話でさせていただきましたように、レコード、特にSPレコードというのは、特に決まった規則にのっとって作られたものではない。内周スタートのものもあれば縦振動のものもある、横振動のものもある。さらに言えば、回転数もばらばらのものであるというようなことが混じっておりますので、そのレコードがどんなレコードなのかということ进行分类すること、その分類をちゃんとすることによって、どう扱ったらいいのかということが見えてくるということにつながっていくんじゃないかなと思います。

ただ、そのことをきちんと把握するためには、やはり統一したデータベースがあれば、この会社のこのレコードはこういう方式なんだということが分かる。それに伴って扱い方も変わってくるということになるかと思うんです。そのあたり、世界中のレコードをいろんなものを見ておられるのがやっぱり毛利さん。毎回毛利さんに振ってばかりで申し訳ないんですけれども。

○毛利 いえいえ。活用ということにつきましては、先ほどちょっと「れきおん」を何度か引き合いに出させていただいたんですけれども、「れきおん」ではこういうことをやっておりません。テーマ別音源紹介。つまりこれは、それぞれの専門家が、浪花節の専門家が浪曲の歴史を音源でつづって「れきおん」のサイト上で紹介をする。また、クラシック音楽、日本の洋楽の歴史をレコードを使って説明をしながら一つにまとめる。ジャズであったり、そういういろんな多ジャンルにわたってテーマ別の音源の紹介ということをしております。

レコードというのは、とにかく膨大な音源がございますので、そこから、専門家であっても専門家でなくても構いません。1人の人が1つのテーマに沿って1つのストーリーをつくる。1人で幾つつくってもいいんですけれども、そういうことができるのがSP音源なんじゃないかと思います。まさに音楽遺産でして、これをいろんな視点でいろんな切り方でプログラムをつくって生かすことができる。大変面白い文化遺産であるというふうに考えております。

○司会 大久保さん、いかがですか。

○大久保 「れきおん」のテーマ別音源紹介は私も面白くて毎回参考にさせていただいている

んですけれども、あのようなものがデータベース上にあると非常に分かりやすいという意見も所蔵館アンケートに挙げられた意見としてありました。レコードとそのレコードに対する資料とか時代背景だとか、レコードコンサートの解説で使えるようなものがデータベース上にあるといいというような意見がありました。

○司会 ありがとうございます。

やっぱり利活用では演奏会が多いということだったんですけれども、先ほどの発言の中でも著作権ということが出てきたと思います。最近、JASRACが非常に活発な活動をされているんですけれども、ちょっと心配しながら演奏会をしているというところがございますので、安心するような情報がありましたら教えていただければと思うんですけれども、いかがでしょうか。

○柳 なかなかこれ難しいですよ。著作権、これはやはり尊重されなければいけない問題ですし、逆にこのSPレコードの歴史をたどっていくと、著作権がまさしく生まれて広がっていく歴史とも重なるわけです。ただその中であっても、やはり文化遺産として広く共有していく、この接点をどう取っていくかということで、私が「エイヤッ」と決められたらいいんですけれども、なかなかそういうわけにはいかない。現状、世界の国々でもそれぞれ違ってくると思うんですけれども、そのあたり、また毛利さん、どうでしょう。

○司会 毛利さんはSPレコードのCDへの復刻ということをされたということもありますし、かなりお詳しいと思うので、いかがでしょうか。

○毛利 クラシックにしましてもその他の音楽にしましても、著作者の没後70年で、一応これはPDとなるんですけれども、ただやはりレコードの原盤権ということがございますので、ほぼ全てのレコードは、一応JASRACにお伺いを立てて使用許可を得るのが無難ではあるなというのが現状なんです。

それから、特に日本の作曲家山田耕作という人は、これはまだコロムビアの専属でございます。なので、これはコロムビアの許可が必要であるというふうに、作曲家、作詞家の権利というのが、まだ実は日本ではレコード会社とひもづけられて生きておりますので、そのあたりの知識というのはしっかり押さえて使うのがよいだろうと思います。ちょっと面倒くさいんですけれども。

CDを作るときは、マイナーレーベルは、もう現在消滅してしまったレーベルなんかはございます。名古屋のツルレコードですとか、ああいったところのものを、こっそり言いますと、意識的にたくさん使っています。権利が特に必要じゃない音源というのは、ニッポーですとか

ツルレコードとか、大阪にございましたコッカですとか、ああいった、もはやどこにも責任の所在のないレーベルのものに関しましては、割と使わせていただいております。

○司会 もう少し安心して利用できる情報はないですか。

実はこの座談会を企画したときはこんなにコロナが拡大していないだろうということで、皆さんに集まっていたいて、座談会後に演奏会をしようということを企画したんです。けれども、こういう形で放送するということになりますとやはり著作権が影響してくるということで、今回は純粋な座談会だけということでやらせていただいているんです。S Pレコードを蓄音機で再生する場合、無料で狭い閉じた世界で演奏するというのであれば、いいということで…

○小口 （一般の演奏会の場合は、）無料で無償、お客さんからお金も取らないし、演奏する人にギャラも発生しない、両方必要だったと思います。

○司会 ということですね。ありがとうございます。そういう条件であればできるということですね。

○柳 大目に見られているということです。

○司会 すみません。一番それが聞きたかったことの一つかなとは思っています。

それでは、続きまして2つ目の質問です。今度は、今後の展望という質問です。「所蔵施設間での情報共有を呼びかけていかれる方向でしょうか」ということです。それから「メタデータ作成などの基準があればご教授願いたい」、それから特に毛利さん、今日は毛利さんが非常に人気なんですけれども、プラットフォームの統一についてということで「統一の主体はどのような団体が担うべきか」ということで質問をいただいております。

この質問は、情報共有ということで、大久保さんから今度はお願いできましようか。

○大久保 情報共有の件でよろしいですか。

○司会 はい。

○大久保 私は、今後積極的に情報共有について動いていきたいとは思っています。ただ私一人の力ではどうにもなりませんので、今回アンケートを取らせていただいたことをきっかけに、各館のご担当者様であるとか連絡先というものをある程度交換させていただきましたので、連絡をあまり遠ざけないようにしながら、少しずつ今後の展開などを説明しながら情報共有の方向で動いていきたいと思っております。

でも、具体的な動きはまだ全く見えていませんので、ぜひ何かありましたらアドバイスいただければと思います。

○司会 ありがとうございます。なるべく協力していきたいなとは思いますが。

○大久保 ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。

次に、メタデータ作成基準などの動きということなんですが、これは数多くアドバイスされた柳さんからいかがでしょうか。

○柳 いえいえ、私の場合は何を基にしたか、最終的に何によったかというところ、やっぱりDHARのデータの分類の仕方ということになるわけなんですけれども、このあたり、先ほどの毛利さんのお話にもありましたように、決して間違った方向ではなかったなど。実際のレコードの情報と、そして表には出てこない情報を合わせていく。そして、それが現在読み取っていかれる情報としてあぶり出していけるというところ。ただ難点は非常に項目数が多くなってしまいうところなんですけれども、このあたり、メタデータとして固めていく際にはどうしたらいいんでしょうか。これも、また毛利さん、申し訳ないんですけれども。

○毛利 片岡プロジェクトでは大変注記の多いメタデータを作っておりますが、そこに情報を、ぶち込むと言うと乱暴ですけれども、情報を入力していくのはこれからの作業になりますので、さあ、どうなるでしょうね。私どもは、ちょっとこれは進めてみないと分からないというのが実は現状でございます。

○柳 難しいところではあるんですね。

○毛利 難しいですね。

○柳 ただやはりカチッと決まったことだけでなしに、いろんな注釈を入れる項目を増やしておくということは、後で何か分かって、これどこに入れたらいいのか分からなくなっちゃうということをなくすようにしないとね。

○毛利 はい。なるべくここにはこういう種類の注釈を入れるという形にはしております。誰でも分かるように、ここには、この欄にはこういう刻印の情報を入れてくださいというふうな、そういうメタデータにはなっております。

○司会 それと毛利さん、もう一点、プラットフォームの統一ということに関してはどんなものでしょうか。

○毛利 プラットフォームの統一といいますのは、これを実際に行うのはなかなか困難なことなんですけれども、先ほども申し上げましたけれども、例えばEUROPIANAですとかアメリカのDPLA、こういったプラットフォームで横断検索をしますと、複数のデータベース、複数どころかたくさんデータベースがヒットするんですけれども、おのおの書誌内容も書式も分類

方法も異なったデータベースが網に引っかかってくるわけです。

ただ日本の場合は、幸いまだS P盤のデータベースの整備自体が緒についているところがございます。そこで、これも先ほど大久保さんもおっしゃっていたように、連携が必要になってくるということなんですけど、今日も関西大学さんと大阪芸術大学さんが連携をされてこういう催しになっております。データベース上でも統一したプラットフォームをつくっていただけると一番ありがたい。

それから、去年のうちの話ですけれども、九州大学さんと熊本大学さん、熊本大学には森・繁コレクションというまた優れたコレクションがございますが、これが連携をしようよという話が、プロジェクトがございまして、たしかシンポジウムもございましたね。ボン大学からの先生を招いてプロジェクトをしたいということがございましたので、こうして今つらつら考えてみますと、西日本では割と皆さんつながってプラットフォームがつかれるのではないかとこのうふうに、全く夢ではないなというふうに考えます。なので、この場合、プラットフォームの主体となるのは大学の皆さんの連携というのが一つ主体になるのではないかとこのうふうに考えております。

○司会 ありがとうございます。

そのほかの方、何かありますでしょうか。

それでは、次は3問目、これは今日いただいた質問です。目次、出ますでしょうか。ここにありますね。「目録記録項目を決定される際に、既存の図書館目録規則などを活用することは検討されましたか」ということなんですけれども、これはどなたにお聞きしましょうか。一番笑っておられる柳さんからお願いします。

○柳 図書館目録の規則ということを活用したかと言われますと、私の場合はもう手探り状態でやっていきましたので、全く検討は、検討することすら思いつかなかったというところが正直なところです。すみません。

○司会 毛利さんのところはいかがですか。

○毛利 国立国会図書館の音楽資料室では、書籍の書誌を使った形でたしか整理をしておられたのではないかと思います。レコードというのは、もともと出版法で行政的に分けられていたものですから、割と書籍に近い性質のものでありますから、図書館の書籍の書誌にこれを当てはめるというのは、決してできないことではない。だけれども、先ほどから申し上げましたように、刻印だとかなんとかという、非常にレコード特有の煩雑な情報を入れようと思ったら、レコードに特化した書式が必要かなというふうに考えております。

○司会 ありがとうございます。

大久保さんのところはいかがでしょう。

○大久保 全国の49か所を図書館と博物館、あと大学施設、その他みたいにして分類をして、そこで統計を取ろうと実は試みたんですが、それもうまくいかなかったんです。何でかという、「何とか資料館」と書いてあって、それが博物館登録なのか図書館登録なのか分からないという事情がありました。なので、その館の特有の状況として、図書館であれば図書館の分類に従おうとするわけですが、毛利さんおっしゃいましたように、SPレコードという特性を生かすならば図書館の分類目録にのっとるべきなのかどうかと、そこからちょっと考えるべきかなというふうにも思います。

○司会 ありがとうございます。

大阪音楽大学さん、いかがですか。

○大梶 図書館のデータベースに入れかけたんですけれども、追記の項目がどんどん増えていきまして、全く図書とはかけ離れたデータベースになりかけて中断いたしました。

○司会 トライはされたということですね。

○大梶 はい。

○司会 大阪芸大さん、いかがですか。

○小口 大阪芸大は柳さんが作られたデータベースを基にというか、使っていますので、おっしゃったとおりなんですけれども、私の経験としては、図書館の分類で展覧会カタログ、それも本なんですけれども、をやろうとしたときに、同じ本ですら特殊な項目があって、展覧会の会期であるとかもはめられなかったというのがありますので、図書館のシステムなんかはもしかしたら活用できるかもしれないけれども、項目というのはやっぱりさっき毛利さんもおっしゃったように独特なものがあるので、別で考えていくしかないのかなと思っています。

大阪芸大の博物館の中でもレコードはレコードのデータベース、蓄音機はまた別で、ほかの造形系の作品は別と全く分けて構築しています。

○司会 それぞれの博物館とか所蔵している館の事情によるというふうなところかなという感じですね。検討はされたけれども、なかなかぴったりとはいかないというふうなところかもしれません。

それでは次の項目に。これは毛利さんに質問ということで「SPレコードの著作権のお話が出ましたが、クラシックレコードのSPレコードがPD、いわゆるパブリックドメインとなる条件をお教えいただければありがたいです。隣接権など注意が必要なことについてもお教えく

ださい」ということです。よろしくお願いします。

○毛利 先ほどちょっと答えてしまったんですけども、著作者の、作曲者の没後70年になりましたらPDになるんですけども、申し上げましたように、メジャーレーベルに関しましては、現在残っているレコード会社、例えばEMI、元のコロムビアですとかHMVですとか、それから日本ですとやはりコロムビア、ビクター、そういったところのクラシック音楽のレコードというのは、やはり原盤権というのがございますので、マイナーレーベルはPDになってしまっています。おとしだったか、名古屋のツルレコードで作られた洋楽のレコード、クラシック音楽のレコードをCDにしました。このときはたしかお金を払っていないはずですが。全部PDになっていきますので。

レコードとなるとどうしてもやはり原盤の権利が生きてしまうので、JASRACさんのほうに何うのが無難だなということになります。その中で、これはお金はかかりませんということもございます。コンサートをしていますと、たまに「このレコードはお金は要りませんよ」ということがあったんですけども、今ちょっと具体的な例が出ませんで申し訳ないですが。

○司会 ありがとうございます。

この件に関して、どなたかほかの情報をお持ちの方、いらっしゃいませんか。

ないようですので、私から。関西大学の学歌、これは先ほど話題に出ました山田耕作さんが作曲されたものなんですけれども、学校で学歌を歌うのは、問題ありません。実は大正年間に山田耕作自らが歌ったレコードというのがございまして、これを今現在、博物館の年史編纂室のホームページで音源を上げています。これはJASRACにお金を払って上げさせてもらっているということがあります。まだ当分はJASRACに権利を支払っているという状況であります。校歌であっても、そういう事例の場合はやっぱりお金が要るということのようです。

あと、次の質問は目次が間に合わないんですけども、今日の話の中からは、レコードの保存方法についてということで、九州大学さんの倉庫の例があったりとか、関西大学も3年間段ボールに入れっ放しというようなお話もありました。縦置き、横置き、それぞれご意見があると思うんですけども、保存方法について柳さんからお願いします。

○柳 SPレコードの場合、LPレコードと形は一緒なんですけれども、やはり保存方法というのが材質の観点から違うのは当然です。SPレコードの場合、縦置きではなくて横置きのほうがいいかと思います。というのは、SPレコードの場合、材質がシェラック系の樹脂でできているものの場合、自重が非常に重い。確かに硬くてもろい材質なんですけれども、少しでも斜めに長期間置かれていますと、自重でゆがんでいきます。ですから横置きがいいんですけど

も、横置きも例えばレコードを重ねていくときにずれていますと、そのずれている状態が長く続いていますと、これも変形の原因になります。ですから真っすぐに積み上げていくということも大事だと思うんです。

ただSPレコード、非常に重いんです。ですから、九州大学さんの50枚段ボールに入れて、あれ持つの大変やと思います。私が在職していたとき、大阪芸大の棚の中に入れていたのは、多くても20枚。それでも、20枚でも、仮にレコード1枚の重さが200グラムだとしましたら4キロあるわけです。できるだけ20枚以下で重ねて保存していかれたほうがいいのかということの一つ。

それと、SPレコードの場合、レコードのスリーブ、先ほど関西大学さんのところで当時のオリジナルのスリーブがたくさん出ていましたけれども、やはり保存する場合にはレコードをクリーニングしてから、オリジナルのスリーブではなくて、新しいものに入れ替えて保存されることをお勧めします。というのは、古いスリーブの場合、そのスリーブそのものにカビあるいは虫がついていることが非常に多くある。それと、もう紙自身が劣化してしまっていて破れてしまうということも多々あるわけです。ですから、新しい袋に入れていただくほうがいいと。

ただこのときも、私も実際にやって「ああ、しまったな」と思ったのは、レコードのサイズ、同じ12インチ盤といいましても、微妙に差があります。29センチのものもあります。これはフランスのパテナンカはインチ法じゃなくてメートル法でやっていますので29センチになってしまうわけですが、インチ法のところでも、実際測ってみると31センチあるいは32センチぐらいあるというレコードもたくさんありますので、大き過ぎても困るし小さ過ぎても困るというようなことも出てきます。

あと、保存のときの温度管理です。シェラックの場合は、熱可塑性の樹脂になります。例えば夏のかんかんの日照りのときに太陽の下にさらしますと、もう30秒ほど出していたらグニャグニャになってしまいます。ですから高温は絶対避けるべきです。あと当然のことながらカビも生える可能性もありますので、温湿度管理というのはできればしたほうがいいということです。

○司会 ありがとうございます。そうですね。どうしても重たさでひずんでくるというところがありますね。それからあと、SPレコードの活用の具体例ということで、デジタルの音源化とかノイズ処理ということをどうされますかということがあったんですけども、これはどなたかお答えいただけませんか。毛利さん、いかがですか。

○毛利 私、監修はしていますけれども、復刻そのものは仲間がやっておりますので、私はむ

しろそういった技術には疎いほうでございます。

○司会 そうですか。実は、今年は本学でも演奏会ができなかったんですけども、去年、1年生の方にレコードを聴いてもらって、私が驚いたのは「あのザーツという音、何ですか」と一番最初に言われたことなんです。針音が気になるということです。CDや今のmp3などの音ですと、そういうレコードの針音はないわけなんです。針音というのが非常にSPレコードやLPレコードの特徴なのかなと思います。ただ、これも私は学生さんに聴いているうちにこの音がもう全然耳につかなくなるよと毎回言っているんです。逆にそれが非常に癒される音になるよということで、学生さんもミニコンサート30分ぐらいたちますと全く気にならずに素直に聴いてくれています。ポツポツという大きなノイズは問題ですけども、針音というのは一つの味かなという気はしています。

○柳 そうですね。SPレコードの復刻のときに、そういう針音、ノイズを全て除去するということがはやった時期も確かにあります。デジタルの処理で、それこそ波形を画像編集するような形でノイズを消すといったようなことをして復刻されたCDもあるわけなんですけれども、何か気が抜けたサイダーを飲んでるみたいに感じてしまうのは、これは私が年がっているせいかもしれませんが、やはりSPレコードの復刻あるいは再生のときに、あまり人為的な手段を加えないほうがいいのか、これは個人の好みによるかもしれませんが、私はそう思っています。

○司会 あと、デジタル化というのはどうなんでしょうか。

○柳 そうですね。デジタル化というのは確かにデジタル化すれば何でもオーケーなんだという捉え方をされる方もおられると思うんですけども、やはりデジタル化の一番の利点は利用のしやすさ、活用のしやすさというところであって、例えばSPレコードの原盤をデジタル化しました、原盤からアナログをデジタルにしましたから、もうアナログの原盤は要らないんだということには決してならない。やはりデジタルの場合も、いつかデジタルにすればもう二度と劣化することはないんだというようなことが言われていた時期もありましたけれども、今やデジタルも劣化するんだと。その上に、デジタルの場合は、記録メディアやフォーマットが変われば再現することが困難になってしまうということ。これは皆さん方の生活の中でも随分起きています。いつかはやったMDは一体どこに行ったんだという問題、それから業務用で使っていたオープンリールのデジタルのテープレコーダー、そのテープ、今どうやって再生したらいいんだという大きな問題も起きています。ですから、やはり私の思いでは、デジタルというのはあくまでも利用するための技術であって、保存ということについてはやっぱ

りオリジナルを大事にしていくほうがいいんじゃないかなという気はしています。

○司会 ありがとうございます。

気がつきますと予定の時間になったよということで、議論は非常に尽きないんですけども、そろそろ予定の時間になりました。

本日は寄贈資料を引き継ぐということで、SPレコードを取り上げました。歴史的音源としてだけではなくて、社会状況を反映する資料としてそれらを活用するデータベースについて、その意義を具体的な例を挙げて討論、提言を行ってまいりました。パネリストの先生方、それからZoomで視聴していただきました皆様方、どうもありがとうございました。

これをもちまして、本日のZoomによる座談会を終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。